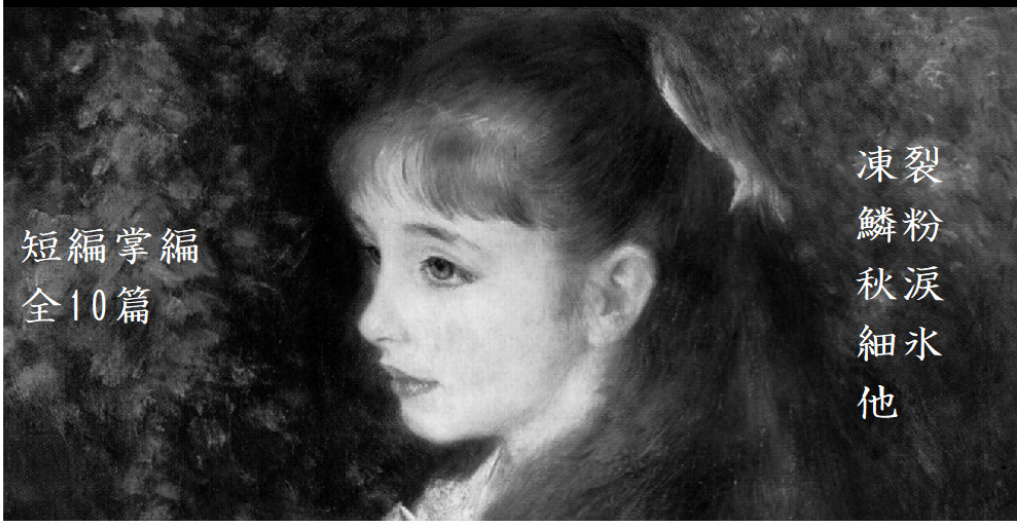
凍裂
飛鳥世一

時刻の物語りを紡ごう
骸の原罪とともに
飛鳥世一・・M.Misha


短編掌編
全10篇
凍裂
鱗粉
秋涙
細氷
他

目次

はじめに 1
■小説『 凍 裂 』 3
■小説『 鱗 粉 』SideA 10
■小説『 新章・鱗 粉 』SideB　ソードの 9 とジャッジメント 17
■小説『新章・鱗粉』あとがき・死するとき殺すとき生かすとき 28
■エセー・随想好日『河井寛次郎という哲学者』 33
■小説『 秋 涙』夢殿第四形態 38
■小説『異端の KARAS は闇夜に二度啼く』 58
■小説『 細 氷』17 才のダイヤモンドダスト 69
■エセー・随想好日『私の中のなにかが死んだ日』 80
■詩編『もう一つの夢殿』 83
あとがき 86

はじめに

二千二十三年も明けた一月三日にここでの新書をリリースするために書いている。今回でのわたしの作品集は二冊目になる。概ね短編や掌編ばかりではあるが今回はエセーも間に綴じてゆこうと考えている。あちらこちらで書いたものを纏め、少しだけ手を入れ直したものを集めさせていただいた。

皆さんにとってこの一年が多幸に彩られた賑やかであり幸せな一年であることを切に祈ります。

ここの作品のどれか一つでも気に入って頂ければ私はそれだけで幸せです。どうか最後までお付き合い頂けますよう心よりお願い申し上げ、はじめの言葉と代えさせていただきます。

筆名　飛 鳥 世 一・M.Misha(ムッシュ. ミシャ)

■小説『 凍 裂 』

■小説『 鱗 粉 』Side A

■小説『 新章・鱗 粉 』Side B　ソードの 9 とジャッジメント

■小説『新章・鱗粉』あとがき・死するとき殺すとき生かすとき

■エセー・随想好日『河井寛次郎という哲学者』

■小説『 秋涙 』夢殿第四形態

■小説『異端の KARAS は闇夜に二度啼く』

■小説『 細 氷 』17 才のダイヤモンドダスト

■エセー・随想好日『私の中のなにかが死んだ日』

■詩編『もう一つの夢殿』

■小説『 凍 裂 』

速水御船・夜雪.png

「パッキャーン」

日本の北に位置する寒冷地。冬の夜あけまえ、外の気温が寒暖計の底を打つころ。高々の生活音や車の音であれば前夜から降り続き積もった雪に吸収をみる。

「パッキャーン」静寂を引き裂くように明けきらぬ北の雪原を凍裂音が揺らす。星は震え、弦月はその爪先から氷柱ツララを落とすほどの樹々の悲鳴が響く。

驚いた鴉たちが啼きわめきちらかし、一斉に梢を揺らす。鴉の動きを目で追いながら立ち尽くしたままの伸一の眼前、一段下に広がった雪原は五月ともなればアスパラ収穫の最盛期を迎えるはずの白い畑が広がっていた。「音」の生じた位置を確かめるためか、伸一は聞こえてきた方こうに首だけをまわす。

どうやら音は林檎畑の入り口をその命脈としていたようだ。凍裂音の始まりの合図は概ね木々の植わり際からとなるのが常だ。湿度の高い凍えた風は、しだいに林の内部までとどきはじめる。起き抜けに梢を揺らした鴉の啼き声を合図に樹々は次々に悲鳴をあげる。
「リンゴ園」の管理者の家だろう。林檎の樹が気になったものか茶の間には明かりが灯った。

伸一の胸の前、十字に交差した両手には緑と白、黒の毛糸で編まれた「ぼっこ手袋」がはめられていた。冬を前に母がみずから編み伸一に手渡してくれたものだった。正直、新聞が配りにくいと感じていた。新聞を掴みにくいと思っていた。それでもその手袋を手放すことが出来ず、毛糸の手袋をはめたまま新聞を配るのが伸一の一日の始まりだった。いつの間にか手袋は手のひらと手の甲の色が変容をみせ、手のひらの指先に近い部分にいたっては何色の毛糸が使われたものかの判別がつかないものとなっていた。

刷りたてのインクの匂いが飛びきらない新聞の墨が手袋を黒く染める。左手だけを雪にこすりつけるとそこの雪だけが黒く滲む。雪のついた手袋を目の前にかざすと伸一は手を振る。雪は小さな玉になり毛糸にぶら下がっていた。

胸の前で組まれた右腕には未配達四十数件分の地方紙朝刊が抱きかかえられている。小学校五年生、大柄とはいっても朝刊四十数件分を抱えることは大人でも両手仕事になる量だ。
東の空が白みはじめる。鴉の啼き声がいっそうに喧しい。星は震えることをやめ弦月はその姿を不確かな幻へと変える。
林の林檎の樹々からの悲鳴はその間隔を広げ始めたようだ。

※

ドイツはベルリンの中心部。街を東西に横断するシュプレー川の中州北側にベルリン大聖堂がそびえる。ドイツバロック様式で建てられたそれは千九百年代初頭に建て替えられたものであり、ベルリン市民の拠り所でもある。
ベルリン大聖堂の道を隔てた南側に広がるのがフンボルトフォーラムとして国際的にも知られた美術館、博物館が集まったアートコンプレックスの一画。ポツダム広場からだと徒歩で三十分ぐらいだろうか。

伸一は日本からの団体ツアー客を連れこの街を訪れていた。終日自由行動日だったツアー客はそれぞれに市内の観光や散策を楽しむ予定となっていた。

ホテルで時間を持て余した伸一は美術館巡りを思い立つと、日本から持参した市街地図が綴じられたガイドブックを開きベルリン市内の美術館情報を探す。
「ベルリン国立東洋美術館…　日本の絵画や版画だけで七千点収蔵、日本の凡ての美術品だけで九千点か。ドイツに来て日本の美術品見学というのも意味は分からんが、時間つぶしにはちょうどいいだろう。行ってみるとするか」
行きすがら伸一は市内を散策し、春まだ浅いベルリンの川もを渡る風の匂いを楽しんだ。途中、何組かのツアー客と出遭い立ち止まっては自由行動中の行き先や情報などを伝えては別れることを繰り返す。
「添乗員さんはどこに行くのですか？」どのツアー客も異口同音にそう口にする。
「あぁ～　散歩ですよ」そう答えることが当たり前のように伸一は散歩と告げた。
中には「こんな所で丸一日も自由行動にされても、どこへ行っていいのやら皆目だわ。ちゃんとバスで連れていてくれれば良いのに」と愚痴をこぼす者もいた。

こんな所で自分の行動先、目的地を伝えようものならツアー客の殆どは添乗員の後を付き従ってくることになる。折角の “自由時間” が台無しとなるのである。

相変わらず日本人は「自由」が苦手だ。旗の後ろを歩くことにかけては世界 200 の国と地域の中、トップレベルの優秀さを見せつけることが出来るのだが、目の前から旗が無くなると途端に路頭に迷う。そのくせ “旗” の少し前を歩こうとし、さも『わたしは団体旅行とは関係ない』という体裁を保とうとする空々しさは忘れない。
することが見つけられなければ寝てしまえば良いだけなのだ……、なにかをする必要もなく日常を持ち込んでも良い。パンフレットに踊る「非日常」という分かったような分からぬような文句に踊らされ、よくよくパンフレットの中身も確認することなく来るからそうなる。
伸一は独り言のように呟きながらシュプレー川のほとりを歩く。川ほとりに設えられた花壇では春の花の植え替え作業が手際よく行われていた。

フンボルトフォーラムは様々な美術館や博物館で成り立っていた。元々はベルリン国立博物館の敷地内なのだがその中の一角にベルリン国立東洋美術館、またの名をアジア美術館が存在する。
日本の版画や絵画だけで七千点を収蔵しているというから日本の美術館規模で云えば兵庫県立美術館と同等クラスになり (※二千二十二年十一月時点) 欧米からの評価も高く、ヨーロッパにおけるジャポニズム文化の定着にも一役買った美術館との評伝も知られたところだ。
フンボルトフォーラム正面に立つとドーム型の天蓋が訪れるものを迎える。建築様式はドイツバロック様式とかネオバロック様式と呼ばれているらしいが、伸一に観えたそれは寧ろアールヌーボ様式であり、ベルエポック様式のそれに想え、ニースのランドマー

クホテル・ル・ネグレスコのファサード天蓋部分のドームを彷彿とさせた。「ネグレスコホテルのドームは確か娼婦ラ・ベル・オテーロの形の良い、たわわなオッパイを模して造られたと云われていたはずだが…ここは誰の胸を模しているのだろうか」

伸一はファサード前で誰に云うとはなしに“たわわなオッパイ”とふざけ半分に呟いてみせた。別棟のベルリン国立東洋美術館まで行き、伸一は切符を買い内部に歩みを進めると重厚な壁や廊下がゲストを迎えた。

伸一は館内売店の位置を確めると真っすぐに売店へと向かい収蔵・展示図録集を買い求め売店脇に設えられたベンチに腰を下ろすと図録集を広げた。

「さて、来てみたは良いものの何を観るべきかが分からない。闇雲に見たところで時間も無駄にするだろう。ましてや三時間ぐらいでは全部は見られないだろうし」そう考えながら目ぼしい画を探すと伸一の指はページを捲る動きを止める。

「この画…誰の画だろう…　速水御船 (はやみぎょしゅう)…　夜雪…　」ドイツ語と英語で書かれていたが専門的なことは何もわからなかった。ただ、画の対象に向き合ったときの表現の巧みさは空間の支配力によるということは理解できた。

「水墨画なのだろうか」伸一はその画からの印象を言葉に置き換える。

画は冬の雪景色の中に一本の木が描き込まれており、その画は伸一にとっては林檎の樹をイメージさせるものだった。

真っすぐと伸びた小枝、力強さを感じさせ風雪によって撓んだ (たわんだ) であろう幹は生命力を滲ませる。

「まだ若い樹だろうなぁ…」伸一は図録を膝に乗せたままその画に見入った。

見学を終えた老若男女が売店へとなだれ込み、ハガキやら図録集やら思い思いの記念品を購入している姿が視界に入る。見学中の会話を我慢していたように様々な国の言葉が売店で飛び交う。と、売店の中、何かが割れる音が響いた。

「ガチャーン」

売店の定員たちは慌てた様子も見せず、電話を手に取ると何処かに向けて話をしていた。程なくすると作業服を着、箒とモップと塵取り、バケツを持った清掃員が二人で来ると床の掃除をはじめた。伸一は速水御船・夜雪に目を落とすと“まんじり”ともせぬままにその画に眺め入った。

※

寒冷地の凍える冬空の下、新聞配達をしながら一生懸命貯めたお金は自ら買うことを夢見ていた自転車「ヤンクル」購入のための資金だった。

ある日の父親の帰宅はそんな伸一の夢をぶち壊しにするには十分なものとなった。
見慣れない男たち三人を従えた父親の帰宅。男たちは父親が招き入れる言葉も待たず、当り前のように家に上がり込むと茶の間のソファーに腰を下ろす。
「オメェラチは、ちょっと奥さ行ってれ　」
父親は子供たち二人の顔も見ずに告げた。茶の間のテレビではアメリカで人気の猫と鼠の人気アニメが流れ、セリフの無い動画に効果音だけが茶の間に響いていた。伸一と、小学校三年生になる弟の伸二は、茶の間に隣接した子供部屋へと下がる。

「兄 (にい) ちゃん、あの人たちなんだべ？　　」
「……なんかの借金取りだべなぁ」
「したっけ、なまらおっかねかったっけさぁ　」

父親が母親に事情を説明している声が微かに聞こえてくる。所々がテレビの効果音でかき消される。と、突然母親の振り絞るような、苦痛に呻き上げるような怒声が子供部屋に流れ込んた。
「何言ってけつかる、そんな金はここの家にはない。連れてけばいい！」
母親は男たちに向けて叫んだ。「あ〜ぁ、連れて行きなさい！　　こったら、はんかくさい者。自分でやったことだ、何処へでも連れて行ってもらいな！　　」
母親はそう言い放った。
どうやら借金取りは競馬の「の●や」の取立人だったようだ。
弟の伸二が怯えながら伸一に告げる。
「兄ちゃん、母ちゃん大丈夫なの？　　」
「シッ！ 静かにしてれ　」伸一は大人の話しに耳をそばだてる。伸二は既に泣き顔をはだけていた。
借金取りのリーダー格は母親に向け「いくらあんだ　」と詰め寄る。
情けなかったのか母親は涙を飲み込んだのか、くぐもった声を振り絞ると「無いッ！」とひと言吐き捨てた。

伸一は、母親の声が聞いていられなかった。朝は夜明け前から建設作業現場の飯炊きに行き昼前に帰ると化粧品の営業に出かけ、子供たちに食事を与えた夜には知り合いが開けるスナックの手伝いに出ていた。
のべつ幕無し仕事に明け暮れ身を粉にして働く母親の姿を見知っていた。
伸一は立ち上がると大人たちが会話をしている部屋に歩み入た。手には、インスタントコーヒーの空き瓶を黒く塗り潰したものが握られていた。
大人たちの目が一斉に子供に向かう。居心地の悪さが伸一を襲った。
言葉を吐き出そうにも上ずって言葉とならず、口からする呼吸だけが微かに言葉の形跡を留めていた。
「お、ふぅ…ふう…おれ…ふぅぅ…少しだけある　」

「なんぼあるよ？　　」
　間髪入れず、口を開いたのは父親だった。母親は鬼のような形相で父を睨みつけている。伸一は母親が何も言わないことを願った。お金だけをその場に置きとっとと子供部屋へ引き下がりたかった。
「２万ちょっとぐらいだべ　」伸一は目標としていた自転車を手に入れるまであと２カ月の所まできていた。
　金額を聞いた大人たちを囲む空気が一気に緩む。小学校５年生の子供にさえ、その弛緩した空気が読み取れた。それぞれが硬直した空気の落とし処を模索していた矢先、最善と思える落とし処はやはり子供が運んできた。伸一は大人たちの前に歩み出ると、床に「貯金箱」をぶちまけた。
　黒く塗りつぶされたインスタントコーヒーのビン。蓋を外すのでさえ指がかじかむ。気を許すと泣きそうだった。一度泣いたら歯止めがきかなくなりそうだった。伸一は小銭を積み上げ、手のひらに載せると列をそろえ数え始めた。
「揺れるたわわなちぶさ」という呪文を頭の中で唱えながら。
十枚ずつの小銭を数えた。

　親に隠れ、はじめて生きた活字に触れたのは小学校四年生のときに手にした「週刊宝石」という大衆小説だった。たしかな意味も解らず、半分以上が読めない漢字に埋め尽くされていた。なんとなく……、そう。なんとなくだけが十一歳の少年の感受性を支配していた。
　ただただ親が困っている姿を観たくなくて母親が泣いている声を聞きたくなくて、父親がいじめられている姿をみたくなくて、ただそれだけで子供は貯金箱を大人たちの間に配達した。
　男たちは、父親から金を受け取り、領収書を渡すと帰っていった。茶の間を支配していたはずのアメリカ製の無声動画アニメは既に終わっていた。

　それから２か月後、冬の寒い夜。伸一は父親に尋ねた。
「前に俺が出したお金いつ戻ってくるの？　　」と。
【あれがあれば新しい自転車が買える】そう思った。
　父親は「近い内にな　」伸一にそう告げた。
　その夜明け、伸一はチェーンも軋みタイヤカバーすら途中で折れた自転車に跨ると新聞配達へと出かけた。
　母親は既に居なかった。

　雪原と化したアスパラ畑の一段うえ。
　白みかけた空を震わせる林檎の樹の凍裂音が哭き響く。
「パッキャーン」
　伸一は胸の前に抱えた地方紙の朝刊を数部ずつ二つ折りにたたむと、冬の真っ白なアスパラ畑にばら撒いた。

「さて…　ホテルに帰るとするか……」

伸一は画を鑑ることも無くベルリン国立東洋美術館をあとにした。

売店脇のベンチの上では開き置かれた図録が所在なさげに残されたままに。

了

■小説『 鱗 粉 』SideA

タロットカード

あぁ…　、いい風。健ニイ…　折角ここまで来たのだからもう少し歩いて行こうよ。私、買いたいものがあるの。天気も良いし、たまには私に付き合ってもいいでしょ？　　」

　ほんの少しだけ僕の先を歩いていた真弓は振り返るとそう言葉にした。
屈託のない笑顔を魅せ、はやりの歌を口ずさみ頭を揺らす真弓の髪には紋黄蝶がとまってる。
【ん？ 何を付けているかと思えば紋黄蝶か…あんなに頭を振っているのに逃げ出さない…　卵でも産みつけてるんじゃないか…　】

「いいけどさ、どこまで行くんだよ。腹が減っちゃったから早く帰りたいんだよ。それともマーがランチを奢ってくれるのかな」

「よく云うわよ、逆でしょ？　私が奢ってもらおうと思っていたんだから…　はぁい！　決まり決まり！　じゃぁ、買い物ついでに可愛い妹にランチをご馳走しよおー　」
「ったく…　しょうがねぇなぁ…　」
　僕はそれ以上逆らうことも無く真弓の後ろに付き従った。

「マー…　どうでもいいけどさ、お前の頭の右側に紋黄蝶がとまっているぞ」
「エー？　嘘…　どこどこ？　」
　真弓は歩くのを止めると首をすくめながら頭を前に突き出してみせる。
お昼間近の太陽は、五月だというのにうんざりするほど熱かった。ここに来るまで何度「アッチィ」と口にしたか覚えていないほど。

　すくめた首の付け根、窪んだ鎖骨下には汗が流れ込んでゆくのが映る。
「とろうか」
　僕は手を伸ばしかけた。真弓は言葉も告げずに両手を前に突き出し僕の動きを制止する。
「何だよ…　とらないのか？　」
「何してるの？　蝶々さん…　私の髪にとまって…　」
「何しているかは知らないけど、もうずい分長くとまっているぞ。どれどれチョット見せてみろ」
「健ニイ、可哀想だからとっちゃダメだよ…　何しているか見てみて」
「わかったから、チョット見せてみろ」

　まったく…　多分、何かのお告げかラッキーハプニングぐらいに考えているのだろう。僕は、蝶の様子を覗うべくそっと真弓の頭を引き寄せた。
　その行為に僕は自分でもドキッとする。ドキッとした自分に気が付くと挙動がおかしくなる。負が連鎖する。心臓の鼓動が強く早く打っているのは気のせいじゃない。気付くな! 今の僕を見ちゃ駄目だ！
　蝶が飛び立つことはなかった。羽をゆっくりと上げ下げしている。呼吸を整えているようにすら見えた。

　５月半ばの陽ざしが真弓の髪にふりそそぐ。と、僕はそこにキラキラとした輝きを見つけた。
　ヘァグロスを吹きつけたように、金色の艶を纏った真弓の髪が優しく風に靡く。僕は静かに鼻から空気を入れる。僕の肺が朝のシャンプーの香りで満たされる。

　見計らったように真弓が口を開いた。
「えっ…　健ニイ、なに？　何してるの…　チョットどうなってるの、教えてよー　」

　僕の胸をグーでトントンと叩く真弓。寝かしつけていたはずの想いが揺り動かされたように疼く。
「うん。あのね、綺麗なんだよ…　紋黄蝶の羽の鱗粉がさ、マーの髪の毛に、ヘアグロスを吹き付けたみたいに金色になってるんだよ」
「マジで　？　、チョットわたしも見たいしー　みせて見せて、撮って見せてよぉ」
「わかったわかった、ちょっと待てよ、今撮るから…　」
　僕はスマホを取り出すとカメラアプリを起動させ、スマホのレンズを髪の毛と蝶々に向けた。紋黄蝶は相変わらずゆっくりと羽を上下させている。「撮るから動くなよ…　」
「うん」
　僕は何度かシャッターを切ると、ゆっくりと歩きながら写真を呼び出す。真弓の黒髪に留まった蝶の周辺は鱗粉で金色になっていた。
「みせて見せて…　」
　そう云うと、僕の手からスマホを取り上げ写真に顔を近づける。
「カワイイ…　綺麗ねぇ…　何してるのかしら、わたしの髪で」
　真弓は指で写真を拡大すると…
「ねぇ…　ニイ、この子、怪我してると思う…　」
　少し悲し気な顔をみせそう告げた。
　真弓はスマホを僕に手渡し「ほらここ…　」と言いながら写真を指差す。
　咄嗟に僕の目は写真を追わずに真弓の指の躍動を追う。
「ねっ、羽のここのところ、チョット剝げてるよね色が変わっているもの…　可哀想…　」
　慌てて目を写真にうつす僕。確かに色が薄くなり剝げかかっているところが見て取れる。
「きっと、鱗粉が剥げちゃって、上手く飛べなくなっちゃったのかもしれないな…　」僕はそう真弓に告げた。
「私の髪に鱗粉をつけたから？　　」少し悲しげに真弓が呟く。
「いや、たぶん何かから逃げたんじゃないかな、他の昆虫に食べられそうになって、逃げた時に傷を負ったとか…　。蝶はね、鱗粉がはげると上手く飛べなくなって絶命しちゃうらしいからな」
「ウマク…　飛べない…　あげくが死んじゃう？　　まじ？」
「うん」
「……　まだ居る？　　あの子？　　」
「あぁ、ゆっくり羽を動かしている」
「ゆっくり羽を休めてね…　。私も…　うまく飛べない…　ひとだから」
　僕の前をゆっくり、頭を揺らさず歩く真弓は静かにそう吐露してみせた。と、何を思ったのか急に立ち止まると前を歩いていた真弓は僕の後ろに回り込み、風裏にでも入り込むように背中近くに頭を寄せると僕の腕を掴む。「なんだよ、ひとを風よけに使いやがって」
「だって、直射日光が当たると弱っちゃうでしょ、この子」
「そうだな…　飛びながら体温調節をする生き物だからな、飛べるようになるといい

けど」

　どこからだろう。カラカラと乾いた竹を打ち鳴らしたような音が聞こえてくる。空気が乾燥しているためか、それとも季節外れの尋常ならざる日差しを浴びた音のせいなのか。歩くに従い“カランカラン”と乾いた音を伸ばしはじめていた。

「鯉のぼりが泳いでる…　」
「鯉のぼり？　　今頃かよ」
　僕は進行方向左前方を見ながら歩いていたから気が付かなかったのか、右斜め前の庭先では鯉のぼりが泳いでいた。
「健ニイ…　あの鯉のぼり、音がする…　カランカランって。なんでなんで？　　」
　真弓は僕の背中につけていた頭を外すと、肩口から顔を覗かせそう云うと僕の背中をとんとんと優しく叩く。確かに音は鯉のぼりから届いていた。「オモシローい。うちの鯉のぼり音しなかったよね？　　」
「しないよ…　普通しないだろ、音なんか」
「普通って何ヨ…　誰が決めた普通なのよ」
　真弓は僕の一言に気色ばんでみせた。幾つかの言葉に過剰に反応するところがあった。

「カランカランって…　ほらマー、鯉のぼりの口元のところに竹の短冊が吊ってあるの見えるか？　　音の正体はあいつだな、きっとあの短冊に願い事とか書いてあるかもしれないな」
「へぇ…　そんな風習もあるのねぇ…　。ねぇ…　まだあの子つかまってる？　　私の髪に…　」
「あぁ…　でも、ちょっと動かなくなったなぁ」
「そう…　触っちゃダメよ、静かにしておいてあげて」
　真弓はそう云い残すと元の体制に戻り、僕の背中に頭をつけたまま腕をつかみながら歩きはじめた。

　どれほど歩いたろう。右だ左だと背中から指示を出す真弓の声に従いながら炎天下を歩いてきたが、目指す目的地に到着したのか、背中から頭を離すと「ここよ、ここ。ここに来たかったの」そう云いながら破顔をみせた。「待てよ、着いたのはいいけどさ喉が渇いたよ。何か飲もうや」
「そうね、じゃぁあそこの自販で買ってくるわ、何がイイ？　　」
「お茶だね…　冷たいお茶」
「ニイ…　今頃、温かいお茶って云われてもありませんから」
　真弓は笑顔をみせると道向こうの自販機へと小走りで駆け寄った。

【なんだここの店、ここに買いたいものがあるのか…　アジアン雑貨専門店…　しかし女はこういう店が好きだなぁ…　どうせチョットしたら捨てちゃうのだろうに】

　僕は真弓を待ちながら店横に設えられたベンチに腰を下ろした。
「はい、お待たせ、冷たいお茶 (笑)　」
「有り難う」
「それにしても暑いね、お茶飲んで、欲しいものを買ったらご飯に行こうね」
　真弓は汗の流れる首もとをハンケチで押さえ眩しそうに笑っている。

「外は暑いでしょう、中で涼みながら休んでくださいな」
　店の主だろうか、僕たちにそう声を掛けてきたのは四十がらみの清楚な雰囲気を湛えたご婦人だった。

「はい、有り難うございます、でもこれ…　飲んでるから…　」
「大丈夫よ、他に誰も居ないから、飲みながら中で涼んでね」
　店の中はところ狭しとアジア各国の雑貨が陳列されていた。
「来たかったんですわたし、ここのお店」真弓は店の主にそう告げた。
「そうですか、じゃぁ、お近くなのね、お住まい」お茶を飲みながら店内をうろつく僕の向こうでは当たり前の会話が交わされている。
「ニイ、ごめん、チョットこれ持ってて…　わたし、買ってくるから」
「あぁ、腹が減ったから早くな」
　はぁい〜と、間延びした返事を残し目的の品の陳列コーナーへと向かう真弓の後ろ姿を目で追う。

【何を買うのやら…　】
　そんなことを考えながら目線を店の奥へと移すと、そこにはバンブーレースが掛けられた小部屋が口を開けていた。
　入り口には「オラクルタロット占いの部屋」という手書きのブラックボードがかけられている。入り口わきには黄色い背景に白黒二匹のスフィンクスか猟犬か、ライオンのような動物を従えた車に乗った戦人 (いくさびと) が描かれていた。
　下に読めたのは THE CHARIOT…　戦車という言葉と七を顕すローマ数字のⅦだった。
【これはタロットカードのうちの七番目のカードという意味なんだろうなぁ】
　そんなことを考えていると、店の主が近寄ってきながら僕に話しかける。「可愛らしい妹さんですね…　。えぇ、今お手洗いに行かれてますからすぐ戻りますよ…　ご興味おありですか？　　タロット」

「あまりよくは知らないんですけど、確か戦車というカードですよね、あの画。なんでしたっけ…　大アルカナカードと呼ばれる…　意味は…確か、勝利とか前進とか、達成とか…　逆だとまた意味が違うとか…　」
　僕はそこまで云うと主の言葉を待った。
「よくご存じね、興味がおありなのね…　お好きなんでしょ、こういうの。言葉が必要になったら、いつでもいらしてね、お兄さんにはこのカードが守り札になりそうだから、これをプレゼントするわ」
　主は掌にのる程度の黒いポチ袋を僕に手渡した。
「お待たせ…　ごめんねニイ、お腹すいたよね、ランチいこ、ランチ、どうもありがとうございました、ステキなものを紹介してくれて」
　真弓はそういうと店の主の手を握った。
「いつでも遊びに来てね別に買わなくたっていいから、お兄さんもまたいらして頂戴ね…　」

　雑貨屋をあとにし、蕎麦屋で冷えた蕎麦を流し込むと、僕たちは自宅に戻った。
「何を買ったの？　　」
「あのね、風鈴を買ったの…　すごく可愛い風鈴…　みてぇこれ」
　真弓は嬉しそうに包みを開き箱から品物を取り出した。カラス細工なのだが、上部には竹で編んだ籠が被せてある。縦長の風鈴。胴体部分には、マーブルチョコレートを想わせる硝子のビーズが埋められていた。
　光が当たれば綺麗だろう…　僕はそう思った。
「でもね、この風鈴…　“音消しの風鈴”っていって音がでないのよ。ただね、特別な風が吹くとその風と共鳴して音が出るんだって…　素敵よね」
　真弓は手にした風鈴を様々に角度を変え、確かめるように眺めていた。
「馬鹿だなぁ…　音の出ない風鈴? 普通、音が出るだろう、風鈴て。聞いたことがないよ音の出ない風鈴なんて」
僕はそういうと脳裏に雑貨屋の主人の顔と言葉を思い浮かべた。
【興味がおありなのね…　言葉が必要になったら、いつでもいらしてね】
真弓が言葉をつづける。
「またニイは”普通”って云った。それは、誰の普通で、誰のための常識なのよ…　」口を尖らせた真弓は普通という言葉を嫌った。

　僕は気付いた…　すっかり忘れていたことに気付いた。
「マー、蝶々が居なくなってるね…　」
「あっ、そうだ！　　えっ、居ないの？　　飛んでった？　　私たち…　忘れてた？　　あの子のことを…　」
「マー、チョットそっちを向いてごらん…　動くなよ、写真撮るから」「何？　　うん」
　そこには紋黄蝶が留まっていた痕跡だけがはっきり残っていた。蝶の姿を形作るよう

に周辺だけが鱗粉で黄色く彩られ真ん中は真弓の地毛の色を見せていた。
「切り絵みたいだな…　」
　撮った写真を見せると、真弓は嬉しそうに声を弾ませた。
「飛べたのよ、きっと…　ありがとうの印なんだわこれ…　あの子からの。やだ、どうしよう、髪の毛洗えないしぃ…　」
「よく云うよ、死んじゃって堕ちちゃってたら気持ち悪いだろう？　　」
「飛べたのよ」真弓はそう云うと、音の鳴らない風鈴を明け放した窓辺に掛けた。

　いい風が部屋の中を抜けてゆく。音の鳴らない風鈴は、黙り込んだきり風にその身を任せたままに右に左に揺れていた。
　ふと真弓を見ると、雑貨屋の主人から僕ももらった黒いポチ袋を開け始めている。
「あそこのママさんお守りくれたの。ニイも貰ったでしょ？　　」
「あぁ…　そう云えば貰ったなぁ。なんか、タロット占いもやっているらしいね、あのお店」
「そうなのよ、結構当たるって評判みたいよ……　ウンショっと…　二人で一緒に見せあいっこしよ…　ほら早く、ニイも開けてよ…」
「子供じゃあるまいし、しょうがねぇなぁ…　はい。いつでもどうぞ」
「せえのーで！　　」
　僕たちは声をそろえてポチ袋からカードを引き抜き見せあった。
　真弓のカードには、インフィニティー、無限大をモチーフとした黄色い蝶を頭上に戴いた大アルカナカード、Ⅰ番のマジシャンが描かれていた。
　僕のカードには、大アルカナカードⅥ番の恋人たちが描かれ、女性の頭の周りには、たくさんの黄色い蝶が描かれていた。
「健ニイ…　あの子…　ちゃんと一緒に帰って来てたね…　ここまで」
「あぁ…　」
　僕はそれ以上の言葉を見つけることが出来なかった。

「ふゅるるるぅぅぅぅ〜」部屋の中を抜ける風には、ラベンダーの甘苦い匂いが混じっている。音の鳴らないはずの風鈴が微かに音を奏で始めた。
「あっ…　」僕たちは顔を見合わせ笑いあった。

　　了

■小説『 新章・鱗 粉 』SideB　ソードの 9 とジャッジメント

タロットカード

美弥 (みや)……。ママね、大丈夫だから……。

「あぁ……　、いい風。健ニイ…　折角ここまで来たのだからもう少し歩いて行こうよ。私、買いたいものがあるの。天気も良いし、たまには私に付き合ってもいいでしょ？　」
　健ニイ……。どうしたの？　　いつもはマーの前を歩くじゃない。マーに背中ばかり見せるくせに……。

　そう。物心がついたときからマーの前には健ニイの背中があった。やせっぽちな背中はお母さんが冷蔵庫に貼っていたメッセージボードと同じぐらい。クスッ……それが次第に。
マーね、今。少しだけ怖いかもしれない……。
　これからのことを考えると……、今のことだけじゃない。マーのことだけじゃない。健

ニイやお父さんやお母さん……、そして一番大切に考えなければならない美弥麻 (みやま) のこと……。

「いいけどさ、どこまで行くんだよ。腹が減っちゃったから早く帰りたいんだよ。それともマーがランチを奢ってくれるのかな」
「よく云うわよ、逆でしょ？　私が奢ってもらおうと思っていたんだから…　はぁい！　決まり決まり！　じゃぁ、買い物ついでに可愛い妹にランチをご馳走しよおー　」
「ったく…　しょうがねぇなぁ…　」

後ろを振り返り見た健ニイはマーと目を合わせてくれない。マーの顔を見たはずの眼は、右の肩口から右頭にむけて泳ぐ。健ニイ……いつものように笑ってよ、マーの目をみながらさぁ。だって……三カ月ぶりにあったんだよ、健ニイ。

「マー…　どうでもいいけどさ、お前の頭の右側に紋黄蝶がとまっているぞ」
「エー？　嘘…　どこどこ？　」
蝶々がマーの頭にとまってる？　ついてきちゃったの、美弥？　駄目じゃない、ちゃんとお利口にしていなきゃ……。
美弥ねぇ、あなたの名前は蝶々さんから取ったのよ。美弥にもいつか聞かせてあげるからね。

ママがまだ小さなころ……そう美弥が今から大きくなって五年ぐらいたったころ。健ニイと河原で虫取りをして遊んでいたのね。その頃のママの背丈ほどもある草が一面に覆っていてね、とても怖かったことをおぼえてるの。陽も陰って来て次第に山から吹き下ろす風が河原の草を揺らす。草と草の間からは西に傾いた夕日が差し込んでね、次第に目の前がオレンジ色のシルクを垂らしたようになって……。ママね、河原の草の中で気を失っちゃったのよ。クスッ……。
目を覚ますとママの前には健ニィがいてね、マー、マーって一生懸命に呼んでいたの。顔中を涙と鼻水でぐちょぐちょにしながら……。空から水がママの顔に降ってきたと思ったら、健ニイの涙と鼻水。
最低。
健ニイね、気が付いたママに何をくれたと思う？　フフッ。緑色のセルロイド製の虫籠をくれたの。籠のアッチコッチが折れたり破れたりした虫籠よ。バッタだったら逃げてたと思うワ。中にはね、一匹だけ凄く大きな蝶々が入っていてね。凄く綺麗だったの。ママね、健ニイに聞いたのよ。「これなに？」って。そしたら健ニイは「ミヤマだミヤマ！、凄いだろー、ミヤマだぞ」って。
ママね……結局、その蝶々のことを調べたのは美弥が来てくれてからなのね。ミヤマカラスアゲハ。それが本当の名前なの。たぶんね……、健ニイは今でも「ミヤマ」だと

思っているわよね。

「とろうか」
　健ニイはマーの頭に手を伸ばしたの。「ダメっとっちゃ」言葉も告げずに両手を前に突き出し健ニイの動きをストップしたわ。
「何だよ…　とらないのか？　　」
「何してるの？　　蝶々さん…　私の髪にとまって…　」
「何しているかは知らないけど、もうずい分長くとまっているぞ。どれどれチョット見せてみろ」
「健ニイ、可哀想だからとっちゃダメだよ…　何しているか見てみて」
「わかったから、チョット見せてみろ」

　あっ！ もう……相変わらず強引なんだから。もっと優しくしてよ。蝶々さんが驚いて逃げちゃうじゃない。せっかくついて来てくれたのにね、美弥。でもね、これでも健ニイ優しくしているつもりなんだよクスッ。……ねぇ健ニイ……。健ニイ？　　ねぇ……大丈夫？　　なんか心臓の音がマーのおでこから聞こえて来るヨ。健ニイ、頭押さえ過ぎだしぃ、チョット痛いかも……えっ？ 健ニイの胸が膨れてる。

「えっ…　健ニイ、なに？　　何してるの…　チョットどうなってるの、教えてよー　」
　マーが健ニイの胸をグーでトントンと叩くと、健ニイの言葉が急に優しくなった。

「うん。あのね、綺麗なんだよ…　紋黄蝶の羽の鱗粉がさ、マーの髪の毛に、ヘアーグロスを吹き付けたみたいに金色になってるんだよ」
「マジで？ チョットわたしも見たいしー　みせて見せて、撮って見せてよぉ」
　健ニイはスマホを取り出してカメラの操作をしながら「わかったわかった、ちょっと待てよ、今撮るから…　」って。
「撮るから動くなよ…　」
「うん」
　健ニイの手元でカシャカシャカシャ……って何度かシャッターを切る音が響いて、ゆっくりと歩きながらスマホを操作していたわ。マーね、もう、待っていられなかったの。それでね「みせて見せて…　」って云うと健ニイの手からスマホを取り上げてやったの。

「カワイイ…　綺麗ねぇ…　何してるのかしら、わたしの髪で」
　綺麗だったよぉ美弥。

　ママの頭に金色のヘアーグロスを吹き付けたみたいで。でもね、少し悲しくなったし不安にもなったよ……。

「ねぇ…　ニイ、この子、怪我してると思う…　」
「ほらここ…　」
「ねっ、羽のここのところ、チョット剝げてるよね色が変わっているもの…　可哀想…　」

　健ニイ……どこ見てるの？
　指？　　マーの指見てる？
　だーぁめ。慌てて写真見たって……。
　もう……あっ⊠⊠⊠⊠⊠⊠。
　もう、マー……、ちゃぁんと見たからね。

　美弥、健ニイ凄く……いやらしいの。フフッ。
　たしか二年前だったかなぁ、健ニイと一緒に映画を見に行ったのね、安い映画館でね、チョット古めの作品を安くみせてくれるの。有名なスパイ映画のシリーズ第一作目だったから席もガラガラ。健ニイと二人で真ん中の席に並んで座ったの。映画も中盤に差し掛かった頃、映画の中でスパイの男の人がシャワー室で泣き濡れているヒロインの女性の指についた血を舐めとるシーンがあって……。
　健ニイその真似をしてママの指を三本も口に含んで……。
　多くなぁい？ 三本って。
　二本までだよね。
　でもね美弥、ママね……映画が終わっても席から立てなくなってたの。
　はじめてだったし、指を口に含まれて舐められるなんて。
　背中の腰のところ……そう今みたいに電気が走っちゃって……。

「きっと、鱗粉が剥げちゃって、上手く飛べなくなっちゃったのかもしれないな…　」
⊠⊠⊠⊠⊠⊠「私の髪に鱗粉をつけたから？　　」フーンあの黄色い粉は鱗粉って云うんだね。
「いや、たぶん何かから逃げたんじゃないかな、他の昆虫に食べられそうになって、逃げた時に傷を負ったとか……。蝶はね、鱗粉がはげると上手く飛べなくなって絶命しちゃうらしいからな」

　美弥……あの黄色い粉が剥げちゃうと飛べなくなっちゃうの？ じゃあ、あの時のママも体中の鱗粉が剥げちゃって飛べなくなったんだねきっと。

「ウマク…　飛べない…　あげくが死んじゃう？　　まじ？」
「うん」
「……　まだ居る？　　あの子？　　」
「あぁ、ゆっくり羽を動かしている」

　美弥……あのね……
「ゆっくり羽を休めてね…　。私も (ママも)…　うまく飛べない…　ひとだから」

　そうね、暑いよね、眩しいよね。健ニイの背中に回り込んじゃおう。
これなら美弥に風も当たらないしお日様も眩しくないよね。

「なんだよ、ひとを風よけに使いやがって」
「だって、直射日光が当たると弱っちゃうでしょ、この子」
「そうだな…　飛びながら体温調節をする生き物だからな、飛べるようになるといいけど」

　健ニイ、随分腕が太くなったね、背中も大きく広くなったし。そうそう……、むかーしね、ママが幼稚園に行ってた頃、家の冷蔵庫にお母さんが貼っていた白い四角いメッセージボードがあってね、そのボードが貼ってある冷蔵庫のところにクレヨンで頭と足と手を描いたの。で、メッセージボードに「にい」って書いたのよ。健ニイが帰って来てお母さんが買物に出かけたときだったかなぁ……。台所から健ニイに呼ばれたのね。健ニイが冷蔵庫を指さすから見るとね、そこにね、健ニイと手を繋いだママが描かれていたの。冷蔵庫にだよ。直接。
　美弥……、お母さんに一人で怒られてくれたの。健ニイ。

　あれっどこからだろう。カラカラと乾いた竹を打ち鳴らしたような音が聞こえてくる。なんだろう、歩くにしたがってカランカランて乾いた音が聞こえてくるの。
「あっ、鯉のぼりが泳いでる…　」
「鯉のぼり？　　今頃かよ」
「健ニイ…　あの鯉のぼり、音がする…　カランカランって。なんでなんで？　　」

「オモシローい。うちの鯉のぼり音しなかったよね？　　」
「しないよ…　普通しないだろ、音なんか」
「普通って何ヨ…　誰が決めた普通なのよ」

　もう。健ニイはいつも普通普通って。普通に考えたら異常なこといっぱいしてるくせに……、マーが怒るとすぐ言葉のあやだって。
　主体性が欠如してるのだわ。うん。それでいてマーのことになると積極的で能動的で

主体的かつ実践的で実証主義的……、弁証法的思考なんかぶっ飛んで……、きっと……本能なんだわ。マーを守ることは。クスッ。

「カランカランって…　ほらマー、鯉のぼりの口元のところに竹の短冊が吊ってあるの見えるか？　音の正体はあいつだな、きっとあの短冊に願い事とか書いてあるかもしれないな」
「へぇ…　そんな風習もあるのねぇ…　。ねぇ…　まだあの子つかまってる？　私の髪に…　」
　美弥……、ちゃんと居る？
「あぁ…　でも、ちょっと動かなくなったなぁ」
「そう…　触っちゃダメよ、静かにしておいてあげて」
　美弥……、大丈夫？ じっとしているんだよ。

◆

　美弥……暑かったねぇ、やっとついたよ。健ニイが途中でこっちが早道だなんて云うから道間違えちゃったし。もう。ここなのよここ、私が来たかったお店。

「ここよ、ここ。ここに来たかったの」
　ごめんね、健ニイ。暑かったよね。お腹もすいただろうし。でもね、マーを迎えに来てくれて嬉しかった。美弥麻 (みやま) も喜んでたでしょ？
　健ニイに初めて抱っこされて……。
　お母さんに健ニイには云っちゃ駄目って云われているから言わないけどね、美弥が生まれてからね、毎週お母さんが来ていたのよ。毎週。
　お母さんの妹、おばさんの家だし、おばさんも一人暮らしだから賑やかになったわって喜んでくれてたけど多分周りに色々聞かれると思うのね「どちらのお子さん？」とか。
　マーが三カ月間住んでいたからご近所さんには「姪っ子の子供が生まれるから、若いし、育てるのも大変だから暫く家で預かることにしたの」って説明していたけど……、変よねチョット。それなのに毎週お母さんが来るのだもの。お母さんね、マーには見せてくれたことも無いような顔をして美弥を抱くんだよ。おばあちゃんの顔？ かなぁ。
　お父さんには内緒にしてるらしいけど、なんか、ただ何も言わないだけって云ってたよ。おばさんも出版社の講演活動なんかもあって出張することがあるらしいから、その時はマーとお母さんのどちらかが美弥のそばにいることになってるよ。
　美弥と離れるのは悲しかったけど健ニイの顔見たとき泣きそうになった。だって心から嬉しそうにしてくれたんだもの……。

「待てよ、着いたのはいいけどさ喉が渇いたよ。何か飲もうや」

「そうね、じゃぁあそこの自販で買ってくるわ、何がイイ？　」
「お茶だね…　冷たいお茶」
「ニイ…　今頃、温かいお茶って云われてもありませんから」
　あの人、本当に下らない余計な一言多いのよ。チョットプンプンだわ、メンドクサイ人。

「はい、お待たせ、冷たいお茶 (笑)　」
「有り難う」
「それにしても暑いね、お茶飲んで、欲しいものを買ったらご飯に行こうね」

　「外は暑いでしょう、中で涼みながら休んでくださいな」

　店のママさんかなぁ。私たちにそう声を掛けてきたのは四十才ぐらいのキチっとした身なりのご婦人だった。高級そうな上下ネイビーカラーに白のリボンカラーのアンサンブル、おばさんの家で観たファッション雑誌で見たことある、たぶん LOEWA(ロエベ)のスーツ！。
３５ mm のローヒールパンプス。トゥーのリボン。フェラガモね。腰下回りにまわしたチェーン付きのポーチはシャネルだわ。ロングの髪は自然な色合いで後ろで留めているのね。
　ふーン、イヤリングはスイングタイプじゃないのね。シンプルに見えてとても上品だし知的。でも石おっきい！　あっ、手に持っているのはタロットカードね、ウェイト版みたいだけど……。

「はい、有り難うございます、でもこれ…　飲んでるから…　」健ニイが答えてる。
「大丈夫よ、他に誰も居ないから、飲みながら中で涼んでね」
　マーと健ニイは促されるままにお店に入ったの。

「来たかったんですわたし、ここのお店」
「そうですか、じゃぁ、お近くなのね、お住まい」
　言葉……気をつけなくちゃ。全部見透かされちゃう。

「ニイ、ごめん、チョットこれ持ってて…　わたし、買ってくるから」
「あぁ、腹が減ったから早くな」
　はぁい〜って言葉を残してママさんのところで風鈴を探していると「可愛いのがあるわよ、奇跡の風鈴て云ってね、バリ島の人たちからそう呼ばれてるんだけど、気に入ってくれるかしら……」
　このママさん、やり手よね。たった１行の中に女子が好きな言葉が３つも４つも入ってる。見せて欲しいとママさんにお願いすると、ママさん、手に持ったウエイト版のタ

ロットカードをシャッフルしはじめた。「はい、じゃあここから好きなカードを１枚選んでみてね」って。

　楽しい！ こんなお店はじめて！ 何か占ってくれるんですかって聞くと、人も物もみんな波動があってねって。重いカードが出た時はその波動を軽減する色の商品を出すようにしてるんだとか。
　オーラソーマみたいなものかなって思ったけど。
　マーが１枚のカードを引くと……
　やっぱりチョット重いわよねぇ。
　大変だったのでしょう今年って。
　何だろ、初めて遇った人なのに、泣けてきちゃう。
　マー、ハイって云っちゃった。
　ママさんが見せてくれたカードはソードの９。
　血の気が引いたよお。
　ソードの中でも重いカード。
　９は特別な数字。
　宇宙を支配する数字の親玉クラス。
　わたしのショックを見抜いたのね、ママさんが優しく教えてくれた。
『現在は未来じゃないの。現在は過去の仲間なのよ』って。
大丈夫。チャンと波動を整える風鈴を持ってくるから待っててねって。

　しばらくするとママさんが縦長の箱を持って戻ってくると箱の中から紙包みを取り出した。ガラス細工で、上には竹で編んだ籠が被せてあって。縦長の風鈴。胴体部分には、おはじきを想わせる硝子のビーズが埋められていたの。風鈴の口の方……下の方に行くにしたがってすぼまった形。

これね音消しの風鈴て云ってね、普段は音が鳴らないの、でもね妖精が乗った風が吹くと音を鳴らしてくれるのよ。

妖精……？　これください！

じゃぁ、最後にもう一枚だけカードを引いてね。おまじないしておくから。

　ここのママさんヤバイかも！ 音消し、妖精、おまじない……マーが無目的だったら新手の宗教勧誘かと思ったかもしれないけど、目的をもってお店に来たのはマーのほう。

えい……そう云ってカードを引き抜いたものを渡そうとすると、自分で見ていいわよって。
　ジャッジメント。それを見たママさん。
「ほ〜ら、ソードの９が過去のものになったでしょ」って。
マー凄く嬉しかった。
　※ウエイト版タロットカードにおける大アルカナカード２０番ジャッジメントの意味・死からの復活、再生、許された罪、目覚め、決断、新たな世界での覚醒などポジティブで強い意味を顕す。

「大丈夫よ……。妖精の風鈴どうしよう」って。
　もうね、マー、なんか足元ふらふらしちゃって。買います買いますって。２回も言っちゃった。お金を払って商品を包んでもらた時に、名前聞かれたのね。「真弓です」って答えたら、これは真弓さんへのお守りって云いながら黒いポチ袋を手に載せてくれて。
　マー「おトイレありますか」って聞いたら、「あっちよ」って笑いながら教えてくれた。

「お待たせ…　ごめんねニイ、お腹すいたよね、ランチいこ、ランチ、どうもありがとうございました、ステキなものを紹介してくれて」
　マーそう云いながらママさんと握手したの。
「いつでも遊びに来てね別に買わなくたっていいから、お兄さんもまたいらして頂戴ね…　」

　雑貨屋をあとにして、お蕎麦屋さんで冷たいお蕎麦を食べると、マーたちは自宅に戻ったの。久しぶりの自宅。て云ってもお父さんもお母さんもいない自宅。健ニイとマーの二人だけのお家。
「何を買ったの？　　」健ニイが買ったもののことを初めて聞いてくれた。「あのね風鈴を買ったの……。すごく可愛い風鈴……。みてぇこれ」
　リビングのシーリングライトの光が当たって綺麗に光っていた。
「でもね、この風鈴…　“音消しの風鈴” っていって音がでないのよ。ただね、特別な風が吹くとその風と共鳴して音が出るんだって…　素敵よね」
　妖精のことは話せなかったよ。だって馬鹿にするじゃないきっと。そういいながらマーは手にした風鈴を様々に角度を変え、確かめるように眺めていたの、そしたら健ニイが……

「馬鹿だなぁ…　音の出ない風鈴？ 普通、音が出るだろう風鈴て。聞いたことがないよ音の出ない風鈴なんて」
　なんか、まるでマーが騙されたみたいな口ぶりで云うの。

「またニイは” 普通” って云った。それは、誰の普通で、誰のための常識なのよ…」
本当にデリカシーが無いんだから。えっ？ なに？ 怒ったの？
「マー、蝶々が居なくなってるね…　」
「あっ、そうだ！　　えっ、居ないの？　　飛んでった？　　私たち…　忘れてた？　　あの子のことを…　」
　美弥……どこ行っちゃったの……ごめんね、ママお店で夢中になって忘れちゃってたのね。ごめんねぇ。悲しい。
「マー、チョットそっちを向いてごらん…　動くなよ、写真撮るから」「何？　　うん」
「切り絵みたいだな…　」
　そう云いながら健ニイは写真を見せてくれたの。美弥、飛べたのね。ちゃんと帰れたのね。

「飛べたのよ、きっと……、ありがとうの印なんだわこれ……あの子からの。やだ、どうしよう髪の毛洗えないしぃ……」
「よく云うよ、死んじゃって堕ちちゃってたら気持ち悪いだろう？」
　なんてこと云うのよこの人。人の気も知らないで、もう。
「飛べたのよ」

　マーがそう云うとね、いい風が部屋の中を抜けてった。音の鳴らない風鈴は、黙り込んだきり風にその身を任せたままに右に左に揺れていたわ。妖精さん乗ってなかったんだね、風に。
　そうだ、お守りお守り……黒いポチ袋はと、あったあった。

「あそこのママさんお守りくれたの。ニイも貰ったでしょ？　　」
「あぁ…　そう云えば貰ったなぁ。なんか、タロット占いもやっているらしいね、あのお店」
「そうなのよ、結構当たるって評判みたいよ……　ウンショっと…　二人で一緒に見せあいっこしよ…　ほら早く、ニイも開けてよ…」
「子供じゃあるまいし、しょうがねぇなぁ…　はい。いつでもどうぞ」

子供みたいな処ばかりのくせにぃ……。
「せえのーで！　　」

　声をそろえてポチ袋からカードを引き抜き見せあったの。
　マーのカードにはインフィニティー、無限大をモチーフとした黄色い蝶を頭上に戴いた大アルカナカード、Ⅰ番のマジシャンが描かれていたのよ、凄―い。
　健ニイのカードには、大アルカナカードⅥ番の恋人たちが描かれていて、女性の頭の周りにはたくさんの黄色い蝶が描かれてるの。

「健ニイ…　あの子…　ちゃんと一緒に帰って来てたね…　ここまで」
「あぁ…　」

　フフッ……健ニイ、美弥に「美弥麻 (みやま)」って名前を付けたいって云ったときと同じ返事だね。……ありがとう健ニイ。

「ふゅるるるぅぅぅぅ〜」部屋の中を抜ける風が紫色に色付いている。何処かでかいだことのある匂い。なんだっけ……、あっ、そう、ラベンダーの匂い。
　ミヤマカラスアゲハはね、健ニイ。
　ラベンダーの花が大好きなんだよ。
　知ってた？　　知らないよね……クスッ。

だからね北海道の富良野にたくさん生息してるんだって……。美弥が私たちのところに来てくれた時に調べたの。

音の鳴らないはずの風鈴が微かに音を奏で始めた。
「あっ…　」ママたちね、顔を見合わせて笑いあったのよ。美弥。

　　了

凡ての愛に幸多からんことを。

■小説『新章・鱗粉』あとがき・死するとき殺すとき生かすとき

２０２３-01-03.png

宗教上の教えが延々と書かれたものには幾つかの種類がある。
概ね神の御言葉であり、その弟子であり預言者と云われる者たちの口伝が活字になったものだ。
　バイブル……聖書・聖典
　ゴスペル……福音書
　ドクトリン……教義書
さて、この三冊に共通したものは何かと云えば共感を目的としてはいないということになる。人間の持つ本能に語り掛け、感動を呼び覚ますことを目的としている。教会や宗教団体の会合などに行くというと敬虔な信者は神のみまえに手を合わせ涙する。これは神と神の御言葉によって感動が呼び覚まされた結果によるものである。
　が、その神と神の御言葉を触媒として共感を得るのが人々の前に立ち説教をする人々となるのだが……。
　説教をする者がバイブル、ゴスペル、ドクトリンだけを信者の前で朗々と朗読しただけでは感動も共感も得ることは出来ないのである。

「おいおい、説教師殿。神は我が身前にありてこれと対話しておるにつき静かに祈らせ給え」と云われかねない。
　さて、そこで代弁者の衣 (威?どっち? 忘れた……♬) を借りた説教者は一計を案ずるのだ。人々にもっと分かりやすく、もっと身近に、もっと入りやすい言葉が必要であると。バイブルもゴスペルもドクトリンも小難しすぎると。読んで理解できる者など一握り、分かりやすく親しみやすい言葉が必要であると。

　　さて、小説を書く側に身を置いてみるというと、どちら側にもなれることがわかる。感動工場製造直売人にもなれれば、共感ファシリテーターにもなれるのである。貴兄・貴姉たちはどちらなのだろう。

　今般、小説・鱗粉の Side B である「新章・鱗粉」ソードの 9 とジャッジメントを書き下ろした。お陰様で今の時点でも望外のアクセスを頂戴している。
概ね二日で 250 件の pv だ。これが note に参加し、活動をはじめて二週間と考えたとき多いか少ないかは定かではない。わたしには確認する術がない。しかし、Side A が B をアップする前に 170 件であったことに鑑みるのであれば、およそ 1.5 倍の pv となるからして、A に対する評価が低いものではなかったであろうことが客観的に、数値として示されたと見ることは吝かでは無かろう。
　同時にシナジー効果で Side A は 34 件 pv をのばし、本日現在 200 を超えている。この 34 件の存在には頭が下がる。確実に読み比べであり理論値の精査に入った存在だろう。とてもではないが私の様な凡人には真似ができない向学心の表れと感動したと同時に感謝と畏敬の念を抱いた。

　世の理 (ことわり) を顕すが如く、続編の評価は弱い (笑)
初作の評判から動員数は増えたものの “スキ” は数字だけみるなら 2 割減。
がわたしとしては、観客動員数に見る表には出ないスキを感じることが出来ていることは付け加えておかなければならない。またそれとは逆に人としての不条理であり不見識を強く感じた読者がいたとしても、これまた然りと始末をつけておくのも書き手の責任だろう。そういう作品なのだ。
ただ、超えても書かねばならぬと信に足れば書く。
わたしにはそれが書いて生きる覚悟に感ジラレルノデアル。

　さて貴兄・貴姉が今回の作品のようなものを書いたとき。
ここの諸先輩なら「美弥」をどのように扱ったか問うてみたい。
結果的に、わたしは殺せなかったし死なせられなかった。

実のところ、わたしはこれに丸二日ほど葛藤をみている。
　神にはなれなかった。
　いや寧ろ、今の社会システムに倣ったときわたしは人間にすらなれなかったのかもしれない。
　裏テーマである。
　ただ…… この Said B。美弥麻を登場させなかった場合、作品の意味自体が水泡に帰したであろうことだけは確かなのだ。栗の入っていない栗羊羹。栗の入っていないモンブラン……チョコレートを使っていないザッハトルテである。

　読みやすいものとするために、平易な言葉とするよう腐心したが、書くごとに真弓への愛と美弥への愛が深まり、感情移入をコントロールすることすら辛かった。「ここで殺すか……」「ここで死んでチョウダイ……」書きながらも葛藤はあった。
Side A は、純文らしきテイストに仕上げている。
Said B は、エンタメ色が強く出ているのだが……
実のところは A より重いのだ。
所々の詰めの甘さはある。
　ただ、最初の真弓の一人語り (回想) までと最後の数行。最後の数行は自分で書いたものなのに胸が熱くなった。
　きっとそういう苦しみを抱えた人たちがいるのかもしれない。
　いや、今の社会システムに倣ったときには確実にいる。息をひそめ、息をコロシ、お天道様をさけ日の当たらぬ道を歩くことを余儀なくされた人々が。幸せとは何かを星々に問いかける人々が。LGBT と括られる人々にとっては「生産性」という政治家ですらが使う誤った見識が流布され、子孫を残すことが善であり、残せぬものは悪であるという風潮が滓のように社会のつなぎ目に入り込みこびり付いている。
　自分の兄しか愛せない。自分の妹、姉しか愛せない。それが愛であれば良いではないか。人、それぞれなのだ。特別視することなど無いだろう。

２０２２-12-05＼(２＼).png

画像
ジョバンニ・フランチェスコ・グエリエーリ作　「ロトと娘たち」バロック・カラヴァッジェスキ

さて、最後に一枚の画を紹介して締めくくりに寄せたい。
旧約聖書外典版のロト記のワンシーンを切り抜いて描かれた、今の時代ではセンセーショナルと呼べる題材を扱った作品だ。
ジョバンニ・フランチェスコ・グエリエーリ作
　ご存知の御仁もおられるように、これは「塩の柱」にされたロトの細君を置き去りにして逃げた、父親ロトとその娘たちの話しなのだが、さて、この娘たち、実の父親と子作りしてしまうのである。

　いつになく饒舌な姉
　妹は父に酒を注ぎ酔いを促す
　凡てを悟ったように父の目はいつかはその明かりを落とす焚火へと注がれ
　口は真一文字に結ばれる
　なんと見事な画だろう

　光と影は闇の支配下にあることを思わせる
　この画は、今から三年ほど前に日本にも来ている。カラヴァッジョ展があった時の他作のひとつとして来ていたのだが、わたしが最も時間を費やし眺めた画の一枚である。
　わがオフィシャルブログでも紹介していたが、この画を題材とした小説を書くことを決め、既に少し前から書きだしている。

「⊠⊠⊠⊠うっ⊠⊠⊠あ!　えぇぇ!!⊠⊠⊠⊠⊠⊠⊠⊠⊠ふぅ……」こういうものでページが埋まらないものを書いてみたい。

　この度は関連作品 1 位から 5 位まで凡て、鱗粉が独占。総 PV 数 9:44 現在、5 作で 1026 件。
　皆様の温かなお心遣いに心より感謝申し上げ、謹んで御礼申しあげます。
　一作でも多く作品作りに励んで参りたいと存じます。
　年末です。ご自愛たまわり、ステキなクリスマスと年末年始をお迎えくださいますよう。

あとがきに寄せて

2022 年 12 月 05 日

飛鳥世一

■エセー・随想好日『河井寛次郎という哲学者』

「白地草花絵扁壺」 昭和14年作

京都国立近代美術館所蔵・河井寛次郎作　白地草花絵扁壺

http://www.kanjiro.jp/

『暮しが仕事、仕事が暮し』
そう謳った “哲学者” がいた。島根県安来市出身の陶芸作家であり、大正から昭和の激動期を創作活動に身を捧げた。河井寛次郎氏がその人だ。

　創作活動期は「京都」を拠点として作陶に向き合っており、現在も河井寛次郎記念館として窯跡をはじめ様々な作品を楽しむことが出来る。

　外国人観光客の足が多いのも特徴的だ。

河井は書家として、詩人としても名を知られている。
チョットインターネットでググっただけでも河井の遺した言葉にぶち当たることに苦労することは無いだろう。
　中でも『暮しが仕事、仕事が暮し』と詠んだこの作などは知られたところだ。どうだろう。この一編を読んだだけでも並みの哲学者ではないことがわかろうものではないだろうか。

　さて、まずは冒頭のサムネイルを眺めて頂けると有難い。
ここを訪れていただける優しく奇特な読者皆さんの感性をフルに働かせて眺めてみて欲しい。タイトルはあるのだがここで書くことは控え、巻末で紹介しようと思う。

　京都は、東大路を北へ上り、１号線の手前 150 メートルを西に入ると、途端に静謐な町並みに変わる。100 メートルも歩くだろうか。北へ上る小さな辻があり、これを上ると右手に記念館が現れるのだが、記念館前はひっそりとしており、ともすると、うっかり通り過ぎてしまいそうな佇まいを見せている。「営業」とは程遠い風情だ。今にして思えば (2015/02/02) 受け継がれてきたご家族にとって、あの佇まいを創り上げ維持されるためには相当の試行錯誤があったであろうことが推測される。
　暮しが仕事、仕事が暮しを体現化してきた芸術家、河井寛次郎にとって、暮らし場所が「浮き上がる」ことは良しとしなかったであろうことを想像することは容易い。
　謙虚に、それぞれの生活の場に溶け込むことによって氏の仕事のスタイルは確かなものへと積み上げられたと眺めることは当然のことと思える。

　話しは前後するが、島根県安来市出身と言えば、芸術愛好家のむきには何度か通われているであろう、「足立美術館」が知られている。足立美術館の創設者・足立全康氏は特に地元出身の芸術家の蒐集に心を砕いたといわれている。そんな縁からか、足立美術館にも数十点の河井寛次郎作品が収蔵されている。
　筆者も河井寛次郎と云う名は昔から私も聞き知っていた。同時に作品も代表的なものは存じ上げている (見たことがあるレベル)。

　特に、ここに紹介した一枚は有名な作品の一つだろう。
したがって、“以下” は私の「感性」を文字おこししたものとご理解頂ければ有難い。
　以前、氏の作品をながむる機会を得た私が感じたこれら作品群のテーマは、「シンメトリー」への拘りと「表裏」の矛盾。
即ち「人間」であり、「暮らしの線上にある信仰」への畏れ。
すなわち「死生観」へと行きついた。
　作品から滲みだす雰囲気は、完全にシルクロードからの影響を受けたものであること

が染付からも覗うことが出来る。葉象化した梵字。草花をモチーフとしてもサンスクリットが顔を覗かせる。

河井は作品作りを通じ、「畏れ」そのものを表現したかったのではないだろうか。人々の暮らしに活きづく畏れ。それは死生観、即ち信仰へと通じる。

「自他合一」河井の座右の銘であったようだ。
畏れは敬 (うやまい) に通じる。
己が限界は、合一によって更なる飛躍を遂げる。
所謂、芸術的に美術的に「美しい」と形容されるには少々言葉がそぐわない。しかし凡ての作品が「映くしい」のである。
“本質” を映し出す手段としての「芸」であり、映くしさだったと私が書けば幾分恣意的にもうつるか。

多くの作品にシンメトリー (左右対称) と表裏がある。
左右対称なれども、表裏対象ではない。
氏の人間観を表した作品群と言えるかもしれない。

そんな河井がいきついた境地が円であり、丸であり、真球だった。完全なるシンメトリー、表裏の一体化、理想を突き詰め行きついたところが真球だったようだ。自他合一の究極の姿としての「真球」である。

しかし、河井は同時に人間の持つ不完全さをも “肯定” していたことが覗える。それが、シンメトリーの「歪み」として表現されているように思えて仕方がない。人間国宝の話しも自ら断った稀代の陶芸作家である。
己を表現する肩書など持たず、暮らしの中に仕事があり、仕事の中に暮らしがある、と戒めた創作活動は私の様な凡人の理解が及ぶところではない。

若いころの作品でも、四角い作品の凡てが、角を削ぎ落され丸みを帯びた肩を見せている。直線的な四角さはない。すべて丸みを帯びた四角さである。
氏が、なにをテーマとしていたかを知る人は多くはないだろう。
行きつくところ「死生観」だったのかもしれない。私はそう眺めている。

私が感じたことは、「河井寛次郎記念館」という「暮らし場所」「仕事場所」でながむるからこそ、類いまれな存在感を感じさせる作品群たり得たのではないだろうかという

ことであり、さきの足立美術館の中で、同じテーマを感じさせることが出来るかと言えば、それはとてつもなく難しいと予測する。

　逆もまた、真なのかもしれない。もちろん、これは力量の問題ではない。
あえて申しあげるのなら「身の置き場」ということに尽きるのである。
　それぞれが、それぞれに相応しい身の置き場に、その身を置いた時、持てる力は開放の時を得る。
「芸術と哲学」は対だ。
京都へお訪ねの際は是非一度お運び頂きたい。

自他合一、シンメトリー、表裏 **___** 。
「人間」というテーマが表だとするなら **___** _。
裏は当然のように「死生観」と落ち着くだろう。

暮しが仕事、仕事が暮しということを突き詰めるならば「死生」を掌るもの達への畏れということに結節するのではないだろうか。

用の美、民藝作陶家。河井を形容する言葉は様々にある。
それもこれも自分で付けた呼称ではない。
　人々の暮らしに寄り添ったところから本来の美のあり様を突き詰めた芸術家であり、その姿勢は河井の哲学によって裏打ちされたものと眺めることが出来るだろう。

「白地草花絵扁壺」 昭和14年作

京都国立近代美術館所蔵・河井寛次郎作　白地草花絵扁壺

画像
京都国立近代美術館所蔵　白地草花絵扁壺　河井寛次郎

さて、皆さんには河井がなにを表現した様にご覧になられるだろうか。

私には、初夏、燕のひなが巣立ちを迎え、その雛に飛び方を教えている親燕の姿に見えるのである。　上手に飛べよ、まあるく飛べよと**** ___。

了

■小説『 秋 涙』夢殿第四形態

不染鉄　作　「夢殿」

その一　満と数えのいろは坂

　その画は、法隆寺の夢殿さんと云われ親しまれてきた八角円堂を描いたものでした。三重県のお伊勢さんと並んで、一生に一度は訪れる地として称される奈良県は飛鳥地方にある法隆寺。その境内 (けいだい) 伽藍 (がらん) の一つ、夢殿・八角円堂の建設発願者は聖徳太子さんです。「お太子さま・お太子さん」と親しむのは、何もこの町に住む者に限ったことでは無いようで、毎年、一月の二十日を過ぎた頃でしたか、全国の太子堂を持つお寺さんでは聖徳太子をお祀りした太子講が催された様子なども新聞を介して伝わります。

お太子様の寺づくりに由来されるのでしょう。建築建設に携わる会社や職人さん、物作りを生業 (なりわい) とする職人さんたちの間では、揃って無病息災職場安全を祈願し、お太子さんの遺構を称える勉強会も受け継がれているようです。
人々が暮らす上での様々なまつり事を語る上でも、切っても切り離すことのできないお人であり場所であり…　。画は、そんな聖地とも云えそうな夢殿さんを描いたものでした。
実はね、私この画を知っているのです。
いえね、正しく申し上げるのなら、描いたお人と描いていた時期を存じているのです。だってね、描いているときに傍で見ていたのですから。

今こうして目の前で、出来上がったこの画を鑑 (み) ていますとね、それはそれは昨日のことのように鮮明に思い出されてくるのです。めんどくさいことや都合の悪いことは忘れることが出来るようになってきました。昨夜の夕餉 (ゆうげ) の献立すら忘れていられるのに、この画のことは忘れないのが不思議でした。
【あぁ…　もしも忘れてしもうたらどないしよ、寂しいなぁ…　寂しいことを忘れてしまえりゃ随分と生きやすいんやろうけど、中々そうは問屋も下ろしまへん…　】

だって、夢の中まで出てきはるぐらいです。
これがほんまの夢殿ですわ…　。
この画を描いているお人の姿かたち。下絵を描く、鉛筆を走らせる白く細くしなやかな指の躍動感。下塗りというもののようです、水に薄っすらと色が着いた程度に暈 (ぼ) かした絵の具を塗る様子からは、とてもこんなに美しい画になるとは想像も出来しまへんでした。
不染 (ふせん) 鉄 (てつ) 作・夢殿　完成披露の展示会がこうして法隆寺本堂で行われ、私は幸いにもその完成した画を鑑ることが出来ました。
冥途 (めいど) の土産なんていう例えがありますが……　、どうでっしゃろう。この歳まで逝 (い) かせてもらえなかったのは、ご褒美だからこの画を鑑てからにしなさい。そう、観音様に云われているようにも思えたもので……　。

「お千代さん、あんたやっぱり来てはったん？　　体の按配 (あんばい) はもうええの？
大事にせにゃ、あかんよ、あら……　今日は、松枝 (まつえ) さんも一緒なん？　　ほな安心やわ良かったねぇ」
「はいな、ありがとねぇ……　お里ちゃんも元気そうやね。きょうは亜由美さんもご一緒な。まだまだ寒いから、体を冷やさんといてねぇ……　お腹のお子にさわったらあかんから」

隣町の古道具屋 (ふるどうぐや) の古女将 (ふるおかみ)、お里も来ていたようです。高々 (たかだか) 二つほど若い、かぞえで九十二才というだけでこのいいよう。云うたところで目くそさんが鼻くそさんを笑うようなものでございますのに。私の心配はさておき嫁や孫嫁の癇癪 (かんしゃく) 取りしてあげなはれ。お前さんが未だに商売にも口を出すものだから、嫁も付き添いの孫嫁も癇癪が溜まっていると愚痴をこぼしているのも評判やないの……　。

そんなことを考えていますとね、まるで見透かしたようにお里のところの孫嫁は始末が悪そうに会釈だけを見せました。

うちの松枝がお里の孫嫁と言葉を交わしはじめた頃合い「ほれ、行くよ」と催促するとスタスタと一人で歩いてゆきます。

【本当に子供のころからそうでしたが、お里の足腰の丈夫さと口の達者さには驚くばかり。道具屋は、目が利いては商売にならぬの例えがあるけれど上手を云うたもの。

そうそう、むかーしこんな話がありました…　。

うちのお店に古着を持ち込んだご近所はんがいはってね、これでなんとか五十銭貸してくれと云うのです。その様子は、当時十二歳の私でも分かるほど、何かいつもより居丈高 (いたけだか) に映りました。大方はね、質草 (しちぐさ) もって質屋に行くときは、少しこう…　肩をすぼめて暖簾 (のれん) をくぐるのが当たり前の風景でしたから、子供ながらに何をこの人はこんなに威張っているのだろうと思ったものです。

店番の母は、そんなには貸せない。これぐらいで持ってお行きなさい…　そういうのですが、頑として引き下がりません。母は何かの事情や理由があるのだと思わはったのでしょう、なんでそんなに自信があるのか、どう見てもそこらの呉服屋さんの店先もの。そういったのですが……、するとそのお客はんが云わはりましてん。

「ちゃうがなぁ、向こう町の古道具屋の前を通りかかったらな、あっこのおちびちゃん、お里いうたかいな、ほれが、店先に出とってな、偉いなぁ、お手伝いかいいうたら、おっちゃん…　この服な買うてって損はないで云うやないか。わしが、なんでや？　　そんなあほなことあるかいないうたらな、なんでかいうたら、買うてまたそれを売ったらええねん。お千代姉さんのとこやったら、キッチリ値打ち通りにみてくれはるやんか、おっちゃんは買うて損するどころか、儲けがでるちゅう仕組みやねんな～　。そういいよる。これまた、はしこい子やないのよお…　せやから、買うた値段以上で預かってもらわにゃ、わしゃ損するがな、こんなん持って帰ったところで、一人もんのわしにどうせっちゅう話しやねん」

なんと売り付けたのはお里だったようです。お客はんはその口上の余りの巧みさと、お里の人たらしの術中にはまってしまったようでした。
この時、確かお里は満で九つぐらいだったはずです。わたしはお里の逞 (たくま) しさに驚き、なんという利発な子だろうと思ったと同時に末恐ろしくさえ思ったものでした。ただ、母は違ったようです。この話を聞くや否や、持って帰るか、お店の言い値でおいてゆくか、さぁ、どっちになさいます…　と畳みかけたのでした。
お客はんはその剣幕に驚きはったんですやろなぁ、渋々母の言い値で預けてお帰りになりました。暖簾を右手でパシッと叩 (はた) き、肩をすぼめて出ていかはった姿は来た時とは対照的に映りましてん。

母は預かった質草を前にすると大切そうにブラシを当て綺麗に折りたたみ、虫よけのショウノウを挟むと飴色に艶をみせる大きな柳行李 (やなぎこうり) に仕舞いながらこういうのでした。
「この箱はね、預かりものやけど…　多分引き取りには来ない人たちのものだからね、将来、お千代にあげるからね…　」と。その行李の横腹には、十二月十二日火の用心と墨で書かれた短冊がボロボロになりながら張り付いてましてん…　】
そんなことを思うと知らぬうちに懐かしくて頬と口元が緩みますねんなぁ。

◆

「お義母さん、大丈夫ですか、少し座って休みはったらどうですの？　　」次男の嫁の松枝が私の手を取りながら声をかけてくれます。
「うん。大丈夫よ。もう少しだけお前の体を掴 (つか) ませたってな…　もうちょっと鑑ていたいから…　」
「はいはい、じゃぁここの腰のベルトの処を掴んで下さいな…　」松枝はそういうと、コートの裾をまくり上げるとベルトを出して私の手を掴んで導くのでした。
私と歩く松枝は踵 (かかと) の高い靴を履く処を見たことはありません。いつも、踏ん張りの利きそうなペッタンコの靴ばかり。そして立つときはお相撲さんのように股を開いて踏ん張るのです。
その姿は、新婚旅行で行った高知桂浜の土佐 (とさ) 犬 (いぬ) の土俵入りのようでしたから、摑まっている私は随分可笑しいやら申し訳ないやらの思いで眺めるのが常でした。

「松枝はん、あんた幾つになりはったん？　　」
「何ですの急に」松枝はそういうと口に手を当てながらワッハハと大笑い。

人目も憚らずという言葉がありますが、私は松枝のチョイと後ろから手綱 (たづな)(ベルト) を掴んでいましたから、傍から見ればそれはさぞかし面妖 (おかし) な光景でしたやろう。私達の横を通り過ぎていかはる招待客の皆はんが、その光景を眺めニコニコし

ながら頭を下げていかはります。
　私は松枝の手綱を握ったままそれをグイグイと左右に振り、小声で「チョット、松枝はん、笑い声が大きんとちゃうの、もう少し声を落としなはれ。みんな見ていかはるから」
　通り過ぎてゆくお人の殆どが顔馴染みいいますか、お知り合いみたいな方たちばかり。中には心やすくお声を掛けていかはるお人もいらっしゃいました。会場のあちらこちらでお辞儀が大流行りです。

　画をめでる会ですから言うまでもなくみんなお喋りは小声です。
　そこに土佐犬さんよろしく踏ん張りをきかせた松枝。後ろから手綱を引き締めた強力 (ごうりき) の私。手綱 (たづな) を横に振る姿はまるで犬を落ち着かせるための仕草にも見えたかもしれまへん。
「お義母 (かあ) さん…　あんまり横に振るとお腹の皮が擦れて痛いですやん」というと口を尖らせ斜め後方の私を見ました。すると、また噴き出して笑い始めたのです。余程、私の顔が恥ずかしそうにしていたのでしょうか「はいはい、ごめんごめん」というと、松枝は正面を向き直り「ちょっと前に六十三になりました…　あっ、満でね、満で」というのでした。「ほな、数えでいうたら…　」私がそこまでいうと、松枝は「はいはい、六十五です」と先に回っていうのです。
「お義母さんのその癖は治りしまへんなぁ…　」松枝は優しそうな笑顔を見せると振り返りながらそういうのでした。
「せやなぁ…　自分の歳云うときは満でしかいわへんのに、人の歳聞いたあと必ず満か数えか確認するものなぁ…　」
「そうそう…　でもね、その気持ち私も分かる様になってきましたわ」
「そうですやろう…　そうなってきますねんて…　私、観音さんにも歳聞くと思うわ…　」
「お義母さんのことやから、多分、数えで教えてやって云いはるんでしょうなぁ…　」
　松枝はそういうと首をすくめてみせるのでした。

　次男の雄介は四十八歳の年 (とし) に労咳 (ろうがい) を患い早逝。二十歳の長男を頭 (かしら) に、十七歳の次男、十五歳の長女と残したままの鬼匣 (きばこ) いりでした。
　親より先に逝くとはなんと親不孝…　そうも思ったものです。せやけど一番しんどい思いをしてたのは嫁の松枝でしょう。
　子供三人を抱えて松枝も悩んだ時期もあったようでしばらくは夜になると一人泣きしていたのでしょう、朝には泣き腫らした目を伏せながら、子供たちの準備をする姿が見られたものでした。突然残され、まるで放り出されたように、何から何まで自分でやらなければならなくなりました。家業の質屋は早逝した雄介が継いでくれていましたから、松枝は嫁に嫁いできていたものの雄介が他界した後はやはり心細かったのでしょう。
　しばらくはかける言葉にも苦慮したものです。それでも孫三人も、今ではみんな立派な釜戸 (かまど) 持 (も) ち。その中の長女が家に残り、入り婿を取ってくれたのでした。
　そんな私も早くに主人を亡くしてましたから、松枝の気持ちや大変さは痛いほどわ

かったものでした。

その二　錫 (すず) メッキのブリキ缶

　この画を眺めていると、描いてはった情景までも思い浮かべることが出来ますねん。
　それは去年の秋のこと…　昭和四十一年の九月も半ばを過ぎた頃…　。

　毎年のことやけどなぁ、斑鳩の地を濡らす秋の長雨は夢殿さんを朧 (おぼろ) の中に包み込みますねん。伽藍周辺さえもけぶるようにうつります。
境内に敷き詰められた玉石は水にふやかした黒豆さんの様子を見せながら、伽藍の一部になったようにピクリともしまへん。
　中秋の柔らかな陽ざしさえあれば、白地に薄く藍を溶かし込んだ石の姿は、訪れる参詣者の足元に心地よい旋律を奏で響かせるに一役買ったことでしゃろう。

　さながら天と地が繋がった合図を想わせるようで、雨をおとすお空も同じ色を見せています。それは黒豆さんをふやかした後の水で塗りつぶしたようですねん。

　太く、切れ目なく堕ちる雨垂れは、吉野の平宗 (ひらむね) さんの葛 (くず) きりをお空から突き出したようにみえ、それは救世観音菩薩の功徳の顕しのようにも思へ、数多 (あまた) 患い事 (わずらいごと) からの救済を試みる蜘蛛の糸にも見えるようで、時には下から上へ降っているようでもあり、昇ってゆくようでもありと映るのです。
　まるで足元から踏み板を外されたように、心細く頼りなくも感じられます。

「お千代。さて、この先どうする。進んでみるもよし、退いてみるもよし」と突きつけられてもいるようで、些かハッとさせられたものでした。

【あぁ…　何でしょう、思い出したら平宗さんの葛きりが食べたくなってきましたよ。こんな歳になっても食べたいは衰え知らぬもののよう。あぁ…　今夜の夕餉は平宗さんの柿の葉寿司にしましょうか。松枝と帰りに買ってゆきましょうか…　】
　私がここにお参りに来るようになってから幾度の秋を迎え送ったことでしょう。秋雨に眺め入ると現 (うつつ) と夢を行き来するようで些 (いささ) か心もとないのでございます。
　境内を埋める玉石の隙間は地面からの雨水が浮かびあがっています。雨は間断なく木立や伽藍、地を打つものの、境内を取り巻く仏性が幸いしてるのでしょう静寂に馴染みをみせているようです。

今また一人の老男がいつもの様に長靴を履き、纏わり (まとわり) 憑く (つく) 雨水すら慈しむように、伽藍むこうへやってきました。

この御仁、名を不染鉄というそうで、どうやら画描きを生業とするそうで足しげく通い来ては法隆寺や夢殿の画を描いてはったようです。境内で顔を合わせるようになってから既に四十年が経ちましたか。毎日毎日、雨の日も風の日も片道一里半 (６キロ) の道のりを歩いて通っていたようです。

しばらく見かけぬなと思へば、長野に行っていたと善行寺土産を私のお店まで届けてくれる心優しきお人…　私が数年前に大病を患ってからというもの、顔を合わせるたびに私を気遣い声をかけてくれるのですが、どうにも私よりも鉄さんの方が儚 (はかな) げな按配を感じさせるのでした。

聞く処によると、東京小石川 (現在の文京区) にある浄土宗の寺、光円寺の住職の倅ということではあったものの、そのくせ背筋のシャンとしたところは覗えず、とても仏の道と近いとは思えなかったものです。

ところが人は見てくれではわからないものでございます。話は聞いてみなければわからぬもの。なんでも昭和のはじめ頃には僧侶になるための検定試験である、律師なる試験も修めていると聞かされたのには随分驚かされたものでした。

第二次大戦後の混乱期には女学校の校長も務めていたようで、とき折、地元の女学生数名を従えてお参りする姿を見受けたものの、境内で私を見つけた途端、その気配、引率からは甚だ遠く俯き加減に歩く様子からは、引率されている気恥ずかしさが滲んで見えたものでした。

「よう降りますなぁ……　」

「はい。本当に……　」

どうということもない当たり前の挨拶が毎度のこと交わされます。

鉄さんは風呂敷包を開くと道具箱を取り出しイーゼルを立てます。そこに古新聞で何重にも挟み込んだ画紙を置くと画を描き始めました。粗末な空き缶を降りしきる雨の下に何個か並べますと、立ちどころに仏性がかき消され缶を打ち付ける雨音が広がります。

缶の大きさがそれぞれ違うせいでしょうか。凡ての缶から流れる音が違うのです。

それはまるで声明 (しょうみょう) のように境内に響きました。

【あ…　、かき消されたと思った仏さんの声は姿を変えただけなのだ、缶を打つ雨音さえ愛おしく思えるのは、観音さんの成せる御業 (みわざ) なのでしょう…　】

カン、キン、コン、カチャ、ヒチャ…　缶の中に水がほどほど溜まりだすと音が止みはじめます。

雨のかからない庇 (ひさし) の張り出した下、鉄さんは夢殿を描いてはりました。

「いやぁ…　これはやはり描きにくいなぁ…　カンバスが湿気を吸って鉛筆が走らない」
誰に云うとは無く鉄さんが肩を落として呟きます。
「下色だけ入れておくとするか…　」
雨を受けていた空き缶を軒下に運び込むと、三十分も経っていないのに一番小さな缶には水が溢れんばかりに溜まってはりました。
「随分溜まりはったね…　お水…　」
「そうですねぇ。チョット薄めすぎですが、まぁ、下塗りなのでやれるでしょう」
鉄さんがはにかんだ笑顔を見せ答えます。
「あら、鉄さん、絵の具は入れしまへんの？　　」鉄さんは四つの缶にそれぞれ絵筆を放り込むと、グルグル水をかき混ぜてはったのです。
「荷物になるし雨が降っていますからね、絵の具チューブをダメにしては大変なので、予め缶の中に絵の具を塗りつけて乾かしておいたんですよ」

　水がたまった四つの缶は、一つの缶を除いてどれも同じように黒豆さんをふやかした水のように薄黒く見えているのです。
「どれも同じ色に見えるけど、鉄さんに違いは判るの？　　」鉄さんはニコリとすると、缶の側面を指さし「ほら、お千代さん、ここ見えますか？　　」といいました。
杖を頼りにチョイと前屈みになり眺め観ますと、缶の側面は「赤」「黒」「青」「白」と、釘か何かの鋭利なもので彫られているのが判りました。

　銀色の缶の肌が少し錆びつき、所々茶色くザラついて見えています。そこに傷つけられたところだけがピカピカと金彩を放って観えました。
「鉄さん…　ごめんなさいね、うるさくて。白っぽいお水は缶の横腹に白って彫ってはりますけど、これも下塗りに使いはるんですか？　　」
「使いますよ…　今日は雨が強いですから画紙が湿気を吸っているので判り難いですが…　半乾きの処にポツポツと白を置くと滲 (にじ) みや暈 (ぼか) しが花火のように広がるんです」
　鉄さんは嫌な顔を一つも見せず、この歳よりの質問に機嫌よく答えてくれるのでした。
「なんだか綺麗ですねぇ…　缶の彫ったところだけがピカピカ光ってはりますねぇ…　」
「今では珍しくなりましたからね、錫 (すず) メッキのブリキの缶は…　」
「錫メッキのブリキ缶ですか…　そんなものがあるの…　」
そこまで云って、私は思い出しましたよ…　私は錫メッキを知っていたのです…　。

◆

私が十三、四のころでしたか、その日の店番は祖母のウネがしていました。

「お千代、茶の間の戸棚の上から二番目の引き出しを開けておくれ…　そうそう、そこを開けるとね、鋏なんかがあるだろ？　　」
　祖母の云う通りに戸棚を開けると、そこには裁縫道具の針や糸、そして鋏やら篭手などが几帳面に整然となおされて (・・・・・) いました。
「そこに針が引っ付いた、まぁるい平べったい石みたいなものがあるかい？　　」
「うん。ある…　」
「そこの針箱に針を外して入れたらそのまぁるいのをこっちに持って来ておくれ」
　そこには確かに針が引っ付いたまま散らばることのない、まぁるい平べったい石のような物がありました。
　針を外しお店の祖母のもとへ持ってゆくと、西洋風の立派な身なりをし口ひげをたくわえたおじさんが立っていました。
「はい、ありがとさん…　」
　私は何が始まるのかと好奇心が抑えられず、店の番頭席を離れることが出来ずに祖母の手元を正座をしながら凝視するのでした。
　ふと目をお客さんのひざ元の上がり框 (あがりかまち) に移すと、そこには綺麗に銀色に輝く「茶道具一式」が整然と並べられていました。
【綺麗…　おてんとうさまの光を受けてピカピカ光ってはるわぁ】
　とも箱もあり、筆字で箱書きが書いてあるところを見た私は、なにか途轍もないお宝が持ち込まれたと思ったものです。
　祖母は平べったいまぁるい石の玉を自分の前に置くと、急須を手に取りそのまぁるい石のようなものの上にかざしました。
「カチン！　　」
　するとどうでしょう。その平べったい石の玉は急須に飛びつくように張り付いたのです。
「あちゃぁぁぁ…　あかんかぁ…　」
「あきまへんかぁ…　」
　声を発したのは祖母とおじさんが同時でした。
　私はその光景を見ていて何のことか皆目でした。なにがどうなっているのか、なにがあかんのかが気になって仕方がありませんでした…　。
　せやけどね、そのお客さんの落胆の様子を見ていると、その場で祖母に聞くことが躊躇 (ためら) われたのです。
「お千代、これを元あった場所に戻しておいてちょうだい」
　その言い方からは、戻したらお店には戻ってくるなという調子が感じられましてん。
　程なくすると、お店から呼ぶ声が聞こえてきました。
「お千代、さっきの石の玉を持っておいで…　」
「はぁい」私はこの瞬間が大好きでした。祖母や母は、ことある毎に新しい知恵を授けてくれました。
「お千代、これはな、磁石云うてな、鉄ととても仲がええねん」
　そういうと、先ほどのお客さんが置いていかはった急須に近づけると、それは祖母の指先から飛び出すように急須に張り付いたのでした。

「お婆ちゃん、私もやってみたい…　」
「よしよし、ほなな、こうして下に置いて…　こうして急須を近づけてみなはれ」
祖母は質草に傷がつくことを懸念したのでしょう。急須の底をかざすことしか許してはくれまへんでした。
「…　せやけどな、この磁石っちゅうもんはな、値打ちの高いもんとの相性は良くないねん。せやから金や銀との相性は今一つちゅうこっちやな…　。ほれ、そこからその簪(かんざし) を持って来てごらん、幾つか並んでる箱がありますやろ…　そうそう、それをここへ…　」
　箱を祖母の前に届けると、祖母はその磁石というものを簪の上にかざしはじめました。
「これは銀やな…　これは鉄、これはええもんやねぇ…　金細工や…　」
　そう云いながら磁石をかざして真贋の見立てを教えてくれるのでした。
「さっきのお客さんのこれはなんやの？　　磁石が引っ付いたちゅうことは鉄なんやろう？　　なんでこんなにピカピカ光って綺麗なん？　　」
「錫 (すず) メッキいうてな、鉄の上から錫でメッキをかけてはるねん…　せやから、磁石が吸いついてしもうたんやな…　」
　祖母はそういうと簪の並んでいる箱から金細工の施された簪を取ると、私の潰し島田に足りない結髪 (ゆいがみ) に刺しながら「お千代な覚えておきなはれや。人の相性云うもんはな、得てして磁石みたいなもんと思うて惹きつけられるもんを有難く思いがちやけどな、そうやないで…　結局は目を養わなあかん。澄んだ目をもちなはれや…　お千代が金や銀のように値打ちの高い人間になれば、磁石は寄ってきいへんから安心やけどな…　」そう言いながら優しく笑うのでした。

　あの簪が祖母の形見となるまでに、それほど時間はかかりまへんでしたなぁ。

　あら…　鉄さん…　そういうたらあんたも鉄やないの、ほな、私が磁石かい？　　あんたが引き寄せるんだか、私が引き寄せられるんだか…　どちらにしても引っ付きたがるんやろうなぁ…　あんたも私も大事な人を早くに見送ってるから…　なんや他人ごとちゃうねんやろなぁ…　きっと…　。

その三　鉄さんの憂鬱

「お義母さん、大丈夫ですか？　　しんどいんちゃいます？　　無理しんと休んでくださいねぇ」嫁の松枝がよう面倒みてくれはりましてえ、私もこうして鉄さんの描いた画を眺めに来ることができまして。それはもう本当に有難いことですわ。

「松枝はん、ゴメンねぇ…　いつもこうして摑まらしてもろて。あんた大丈夫か？　　重たいことあらしまへんか？　　」

「何いうてますのん。手綱引いてもろてるだけですやんか。なーんもしんどいことありません。あっ、お義母さん、いい席が空きましたで〜　あそこに座って眺めさしてもらいましょ」
　不思議なものです。こういう時は足がこう…　シャシャシャシャいうて動きますねん。丁度画の正面。少し距離はありましたけど、座ってみることが出来るベンチシートが空きました。
「あ〜　これはいい按配だねぇ。これで少しは落ち着いてみられそうやねぇ」そういいながら松枝を眺め観ると、私が摑まっていた腰回りのゴタゴタを直しておりました。

　鉄さんの描かはった夢殿さんは、秋の長雨の中に佇む夢殿さんを描かはったものなんやけどね、太〜い雨が幾筋も幾筋も画面いっぱいに垂れ堕ちてましてなぁ…　それが按配寂しそうに見えるのです。ただね、扉障子にほんの少しだけ中からの明かりが挿してましてな、その明かりがそりゃ可愛らしゅうて、可愛らしゅうて…　。

「あぁ…　あの明かりは鉄さんの魂なんやろなぁ…　早くに奥さんなくしはって、寂しい気持ちを顕した鉄さんの魂なんやろなぁ」そう思えたものでした。
　夢殿さんの南の空には雲を割るように横一条の光明が射してましてな、それがまた打ち立ての真綿のように柔らかでやさしい光でした。
「松枝はん…　いい画やねぇ〜私この画を鑑ているとなんか泣けてきますわ。ねぇ？」
「お義母さんは鉄さん贔屓やからねぇ〜　私なんかこの画を観てると、葛きり思い出しましてん (笑)　はぁ…　なんや葛きり食べとうなってきますわ」
　私は吃驚しましたよ。この子に読まれたんちゃうやろか…　思うて。
「松枝はん…　あんたなぁ…　似てきはったねぇ〜　」
「誰にですのん？　　」
「私にやないの (笑)　私もな、さっき平宗さんの葛きり思い出しましてん…　」
「(笑)　お義母さん…　ほな、帰りに食べて帰りましょ。晩ごはんに柿の葉寿司をこうて帰りましょ…　」

　長いこと一つ屋根の下、苦楽を共にして来たお蔭でしょうか、観音さんの粋なお計らいでしょうか。考えることは寸分違わずを思わせます。
「そうそう…　たしか家に鉄さんの画が一枚だけありましたなぁ…　、富士山を描かはった立派な画。お義母さんあの画はどこに直しましたん？」
もう二十年以上前に鉄さんから私が買うた画のことを松枝は思い出したようです。
「あのな、私の柳行李わかるか？　　そうそう…　あの柳行李や。何いうてますのん捨てますかいな。お婆ちゃんに祟 (たた) られるわ。私の部屋の押し入れにちゃぁんとはいっているから…　あんたぁ、ちゃんと引き継いだってなあの行李」
「はいはい」ほういうと松枝は私の隣に座りながら足を優しくさすってくれてます。

人の手ってな…　、なんでこうして温かくて柔らかいんですやろ…　。
　私は孫やらひ孫やらそしてこの松枝やら…　、たくさんの温かくて柔らかい手に囲まれて過ごせてますけどな、鉄さんを想うとねぇ〜　自分の手しかあらしまへんやろ…なんぼお坊様の修業したゆうても、そりゃぁここまで寂しかったですやろなぁ……　。

◆

「ごめん下さい…　ごめん下さい」
「はぁい…　おや、鉄さん。どないしはりましたのこんな寒い日に」

　今から二十年以上前…　昭和二十年の師走も半ば。鉄さんがうちの店を訪ねて来ましてん。最初に対応に出たのは早くに逝去した次男の嫁の松枝でした。
「やぁ、松枝さん。ご無沙汰してます。面目ない。じつは年末を迎えるに窮してしまい、ついては画を一枚かたに預かってもらえぬものかと…　」
「わかりました。ほな、お義母さんを呼びますからチョットだけまってくださいねぇ」
　松枝が奥の私の部屋に来るや早口で仔細を告げるのを聞くと、私は「ありがとう」と一言発しお店まで転げるように出てゆきました。シャシャシャシャ…　と。

「鉄さん、寒いところわざわざ来てくれて有り難う。なんか松枝の話しでは画を一枚預かって欲しいとか…　」
　取り次いだ松枝は店に顔を出しません。このあたりは本当によくできた嫁でした。
「お千代さん、申し訳ない。恥を忍んでなのですが、この年の瀬、なんとも窮してしまい、無理を承知でお訪ねしました」
　さぞや居心地が悪かったのでしょう。鉄さんは顔を赤く染めながらそういうのでした。
「鉄さん…　私とこのお商売は、値打ちがはっきりついているものにしかお貸しすることは出来しまへんね。せやから、美術品や工芸品という文化的付加価値を評価する物差しは恥ずかしながら持ってませんねん。まずそこを許したってくださいねぇ」
「そうですかぁ…　」鉄さんは肩を落としていました。
「でもね鉄さん…　もしも鉄さんが良ければ、私がその画を買わしてもらいましょ」
「ええっ！　　買ってくれるのですか、私の画を」
「お友達の画を一枚買うぐらいがなんですの…　チョット遅いぐらいですわ。はい、ほななんぼで買わしてもろたらええのんやろね」

　鉄さんはモジモジしてました。言いにくそうにモジモジと下を向いて。意を決したようにお顔をあげると…
「では、お千代さんの好意に甘えて八百円で…　いや、七百円で…　」
「珍しいお人やなぁ (笑)」

「はぁ…　」
「うちとこ来るお人は皆だんだんに高向 (たこう) なっていかはるのに…　鉄さんは安うなっていかはる…　そんなお人聞いたことありまへんわ (笑)　わかりました。ほな、これで買わしてもらいましょ」

　私が番頭席の上に用意したお金は「千五百円」でした。これでも高いか安いか分かりません。ただ七百円、八百円はギリギリですやろ。年の瀬を迎えるに窮しての七百円…　、ほな新年を迎えるには足らしまへんなぁ。私はそう云いながら鉄さんの手に千五百円を握らせました。
「お千代さん…　あなた画をまだ鑑てないではないですか。鑑てからにしては如何ですか」
「鉄さんがお客はんなら、勿論みさせてもらいます。せやけど鉄さんはお友達です。私はお友達の画を買わしてもろただけ。その風呂敷に包まれた画は、あとでゆっくりみさしてもらいます…　、松枝はーん、はいな悪いけどね、あったかーいお茶を一杯いれてここまで持って来てくれるか。ほして、この包みを仏間へ持っていておいてな…　」

「あんなぁお千代。よーく覚えておくんやで。お商売先からものを買うときはな、絶対に値切ったらあかん。びた一文たりとも値切ったらあかん。」
祖母のうねの教えでしてん。
「でも…　みんな闇市で買い物するときに、まけてくれまれてくれっていいはるよね」
「そや。でもな、うちとこのお商売はな逆なんや。もっとくれ、もっと貸してくれ云われるやろ？」
「うん…　皆言うなぁ」
「仏さんが教えてくれる世界にはな、餓鬼道ちゅう世界があってな、この世界はとにかくもっと、もっと…　もっと、もっというて欲しがる世界でな、もっとまけろ、もっと高く…　それは欲のキリのない世界なんや」
「お婆ちゃん…　私もなぁお母さんに時々言うてるわぁ…　もっとお飴さん頂戴て…　」
「ほうか…　ほしたらなお千代、お母さんにお飴さんもろたらな、今度はもっと頂戴って云わんときや。ほしてなお爺ちゃんのところへ行ってな、お飴さん頂戴て云うてみ。きっとお爺ちゃんもくれるから。ほしたらお千代、倍に増えるやろ。お飴さん。ほしたら誰からも小言いわれんですむやろ」
「ほな、お婆ちゃんにお飴さん頂戴云うたら…　わたし…　大儲けやね (笑)」
「あかん…　この手はお婆ちゃんには通用しまへん (笑)…　」
「ええか、闇市で買うものいうたらな、大概値段ははっきりしてるもんが多い。高かろうが安かろうが高々知れたものや。要はお商売先の儲けちゅうこっちゃな。だから値切ったらあかんのや。私らが値切らずに買い物したらな、お商売先がうちの質屋に来た時に、もっとくれ、もっと出してくれ…　云えんくなるやろ。人様の声いうもんは千里を走るいうてな、ほれがお商売の評判ちゅうもんになるねん。せやからな、まけてくれとは言

うべからずが鉄則なんや」

　事実、祖母が買い物先でまけてくれという言葉を使ったところは見たことが無かった。逆にうちの店にきはったお客はんは、みな、祖母の顔を見るとあきらめたように自分で金額をいうことは無く、祖母が提示したお金をもって帰りはった。

　昭和二十一年正月の松もまだとれぬ頃…　鉄さんからの年賀状が届きましてなぁ。
ハガキの裏には朗々とした感謝の言葉と共に縁起物の画が微に入り細にわたって描き込まれてました。

「お義母さん、大切に…　画と一緒に直しておきましょうか。将来、もっと (・・・) 値打ちが出るかもしれまへんから (笑)」
松枝が楽しそうに言葉にしました。その年から年に二度、鉄さんからのハガキが届くようになりました。
　私が鉄さんの画の秘密に気が付いたのはこのハガキの画を観るようになってからでした…　。

その四　鉄さんの秘密

昭和三十六年の夏の日でした。この歳の夏はそりゃぁ暑い日が続きましてなぁ。夏入り前の梅雨が空梅雨でしたから奈良県全域に渇水警報いうもんがでましてな、取水制限いうですやろか、お天道様の高い時間帯になると水道が止まってしまって、そりゃぁ往生したものでした。

　そんな七月の三十日も間近のころだったと思います。松枝が嬉しそうに声を弾ませて私の部屋までハガキを届けてくれました。

「お義母さん、鉄さんから暑中見舞いが届きましたよ。また可愛らしい小さな家がたくさん描かれた絵ハガキ。こんな小さな家をようもこんなにたくさん描けましたなぁ、鉄さん」
「ほうかぁ、どれ、松枝はん、ちょっとそこの虫眼鏡取ってくれるか。はい、ありがとさん。どれどれ……、松枝はん……、あんた、これ家か ？ わたしには黒ゴマさん潰したようにしか見えしまへんわ。ようまぁこんな小さい家をたくさん描きはったなぁ」

「でも、やっぱりあれですねぇ〜、本職の画家さんだけあって上手ですねぇ」
「ほうかぁ？ そういうもんかいねぇ」

　この頃の私は目がよく見えなくなっていたこともあり、チョットボケも入ってきていたんでしょうなぁ、松枝のいうことも分かったような分からぬようなおかしな按配になってきてましてなぁ。

「松枝はん……、悪いけど、押し入れから柳行李をだしてくれるか」
「はいはい、絵ハガキが入ったお煎餅の箱ですやろ？」
「そうそう、はいありがとう」わたしはそう云うと箱を開けて中に直しておいたハガキを出して手に取りました。
　手にした虫眼鏡で一枚一枚の絵ハガキを眺めはじめたものでした。するとそばで見ていた松枝が云うのです。
「お義母さん、鉄さんの画って風景とか景色が多いなぁ……　まあ、季節の挨拶やから当たり前かもしれへんけど」と。
　わたしは云われて改めてまじまじとその絵手紙を見ました。
　わたしはその鉄さんから送られて来た三十枚ほどの絵ハガキを手にしながら泣いてしまっていたのです。

「お義母はん、どうしはったんですか、具合でも悪いんちゃいますの？　　あきまへん、チョット横んなりはった方がええんちゃいます？」
　松枝は一生懸命に気にかけてくれましてな、一生懸命にわたしの背中をさすってくれてましてんけどな……。
「松枝はん……、鉄さん……、寂しいねん。あの人な寂しいんよ……　」
わたしはハガキを手にしたままオイオイと泣いてしまっていたのです。
　驚いたのは松枝だったでしょう。何も言わずに私の背中をポンポンと優しくはたき、さすってくれていました。
　鉄さんからのハガキに描かれた画のすべてに私は秘密を見つけたのです。
　そりゃぁねぇ、普通にご挨拶を交わすだけのご縁のお人でしたら私もそこまでは感じなかったかもしれまへんなぁ。
　せやけどね、鉄さんとは仏さんや観音様が取り持ってくれたご縁。わたしがもう少しシャンとしてたら店を松枝に任せたまま鉄さんの面倒を見に転がり込んでたかもしれまへんなぁ……。

◆

　むかぁしむかーしなぁ、私が尋常小学校から高等小学校に上がった年でしたから、そ

う一年生でしたやろか、せやから十歳の時でしたわ……

「ぐーにーはん〜、ぐーにーはん、お千代のあだ名はぐーにーはん」
ある日を境に、突然降って湧いたように私にあだ名が付けられましてん。最初は私も何のことかわかりしまへんでした。それが毎日毎日、来る日も来る日も云われるようになりましてなぁ。
ある日、学校から帰り祖母のウネに「おカァさんは？」と尋ねると買物行ってるいわはりましてなぁ、なんか私、急に寂しいなって祖母の膝に突っ伏して泣いたんですわ。驚いた祖母は「どしたん？ 学校でなんかあったか？」そうやさしゅうに聞いてくれました。私は泣きながら祖母に聞いたものです。

「おばぁちゃん……、あんな、学校でなぁ、みんながぐーにーはん、ぐーにーはん云うねん。ぐーにーはんって、なんやろか？……」ほうしますとな、祖母が大きな声で笑い出しましてん。
私はなんやビックリしてしまいましてなぁ。
なんか面白い漫談か何かのことかもしれない思うたぐらいでした。

　ほうすると祖母は急に真面目な顔になると……。
「いいかお千代、今から云うことよう聞くんやで。これからなお千代が大きゅうなってくわな、するとな、いろんな知恵がついてくる。ほしてな、周りの人間達からかけられる言葉はもっと厳しゅうなる。言葉が無ければもっと厳しい、そりゃぁ恐ろしい態度を取られることもある。ええか、負けたらあかん。せやけどな、おばあちゃんがいう負けたらあかんちゅうのは、喧嘩をせっちゅうこっちゃないで。大人の言葉にな、臍を噛むいうてな、どうにもならない悔しさを顕した言葉があるんや」
「ほぞ？　　ほぞってなんやの？」私がそう聞きますとなぁ、祖母は私のお腹のおへそをチョンチョンとつくと「ここやがな、お臍さんや」というのでした。

「お千代、おまえさんは自分で自分のお臍を噛むことが出来ますかな。……そうや、できしまへんやろ噛めない臍を噛みたくなるほどの悔しい気持ち。それを大人たちは臍を噛む云うてますのんや。でもなお千代。噛むのは臍やないで。唇や。それもなあんたの心の唇や。うちとこのお商売はなぁ、お金を借りてくれるお人がお客はんや。ええこと教えてやろか、お千代がなぁ、大きゅうなった時にな、必ず、必ず見たことあるお人が、ほれ、あの暖簾をかき分けて入ってくる。必ずや。」

祖母はそこまでを云うと首だけをしゃくり上げるようにお店の暖簾を見たのでした。私には祖母が何かを思い出している様に見えたもんでした。
「おばぁちゃん、それは私の知っている人ちゅうこと？」

「そうや。同級生かもしれへん。年下のほれ……、なんちゅうたかいねぇ……、せやせやお里ちゃんかい。かもしれへん。どこの誰がいつお客はんになるかもしれへんのや。お千代……、人間の勝負処云うのはな突然来る。その時のために今は心の唇をグッと噛み締めて色んな知恵を溜めなはれや」そう笑って言うのでした。
「わかった。わかったけどわからんのがな、ぐーにーはんってのはなんやの？」
「あぁ、それは質屋のこっちゃ。むかーしな、質屋云うもんは博打場のすぐそばにあってなぁ、博打で負けて借金こさえた人や、もうひと勝負したろおもた人たちが、身ぐるみあずけていったところやったんやなぁ。博打場ではな、五という数字をグ云うてたんやな、ほして二は、にのままや。ほしてな、奇数を半、偶数を丁いうて二つのサイコロや花札でな、出た数字の丁半を決めるいう博打があった。五と二を足すと七やろ、ほしてそれは半の目になる。せやからぐーにーはんなんやなぁ……　これまた、こまっしゃくれたガキやなぁ」

祖母はそういうと声をたてて笑うのでした。

　次の日、私が学校へ行くといつもの子達が徒党を組んで「ぐーにーはん」と私のあだ名を呼ぶのでした。そこへなぁ、いつもは教室でもひとりでおる男の子が現れるやいなや、三人の男の子たちを一瞬でけり倒してしまったのです。
　私はその光景にあっけにとられ何も言うことが出来ずただ眺めることしかできしまへんでしたのや。
　その日の午後の休み時間のことでしたか、私が教室に戻ってみると男の子二人が言い合いをしてましてん。言い合いしてる一人は、私を助けてくれた男の子でした。もう一人方は町の相談役をしている家の小倅でした。
「偉そうなことぬかすんやったらな、家の家賃払ってからにしてもらおうか」
「お前になんの関係がある！ 親のこっちゃないかい。わしに関係あるかい！」
そう言い合っていたのでした。どうやら私を助けてくれた男の子の家は窮していたようであり、教室の中でも何となくそんな話は出ていましたが、その話を聞きつけた小倅が朝の仕返しとばかりにみんなのいる前で窮状を暴露してしまったのです。
　そうなのです。朝蹴り飛ばされた中にはその小倅も入っていたのでした。
それからもその男の子は教室で一人でいることが多かったようで、気になり時折みると、いつも教室の窓のそとに広がる空を眺めているようでした。雨の日も晴れの日もでしたなぁ。

　あれから二十年が過ぎたころですやろか。暖簾を……、そう、こう肩をすぼませ首を前に突き出してくぐるお客はんがいらっしゃいましてなぁ。
時計をひとつポンと番頭席にぞんざいに放らはると「二千円貸してくれ」云いはります。品物をみさしてもらいましてな「七百円」しか貸せませんいうと、大きな舌打ちをするとそれでいいいわはりましてん。

「ほな、何か名前の分かるもん出してください」私が云うて出さはった身分証をみて驚きました。町の顔役・相談役の小倅でしてんなぁ。
　向こうは知ってか知らずか、私の顔など一切みいしまへんでした。
お金を渡すと肩で暖簾を切るように、颯爽とお店を出ていかはりました。

【おばぁちゃん、あんたは偉いお人やったなぁ……、来ましたで、来よりましたがなぁ】

私は一人そう笑ったものです。
　私は鉄さんを見ていると一人でいたあの男の子のことを時折思い出していたのです。どうしてはるやら……、良い一生を送ったであろうことを観音さんに祈るのでした。

◆

　鉄さんから送られ来る絵手紙の秘密、それはどのハガキにも一人の人間も描かれていなかったことだったのです。
　人が住んでいる集落や、田畑が描かれたもの、そして山間の小径、冬の雪道……。どの画にも人が一人も描かれていなかったのです。

寂しいんやろうなぁ。苦しいんやろうなぁ。なんて寂しさを抱えたお人なんやろう。わたしはそう泣いたものでした。
その後、鉄さんの画集が発売になると聞き、わたしはその画集を買わしてもらいましてん。
小さな字で説明が埋め尽くされていましたから松枝に読んでもらいました。すると。

「立派な画や大作を描こうとは思わない。寂しいんだから寂しい画を描きたい」と鉄さんの言葉が載っていたのです。
「お義母さん、鉄さん寂しかったんですなぁ」松枝がそう言葉にしました。
「寂しかったんとちゃうねん、あの人は今でもずっと寂しいままやねん」そういうと私はまた声をあげてオイオイ泣いたものでした。

◆

その五　ことわり

なんですやろなぁ、なんかねぇ色んな声が聞こえてきますねん……。とおーくのほうなんですやろなぁ。これまたおかしな按配になってきましたなぁ〜、たしか私、画を鑑ていたはずなんやけどなぁ。ベンチに座らしてもろうて。

いろんな声が「お千代はん、お千代さん、お千代ちゃん」いうて呼んではることはわかりますねんけどお顔がみえへんよって。

なんやの、お里の声もしてるやないの……、フフッ、お里ちゃんあんたのことは声を聞いただけで分かるわ。お嫁さんたちには優しくしてやりや、せやないと、あんた、閻魔さんにいじめられるで。

「お義母さん、お義母はん……、しっかりしてください、お義母はん……」松枝でっしゃろうなぁ、私のスポンのベルトを緩めようとでもしてるんやろうけど、不器用なこでしてなぁ。

なんやベルトが取れしまへんのかいな……、松枝はん、あんまりほうして振ると、お腹の皮が擦れて痛いですやろ……。

あちゃあぁぁ　あかんかぁ……痛ないわぁ。

ん？　なんて、松枝はん、なんていいはったん？　鉄さん？

こりゃあかん、あきまへん。おきにゃぁ……、松枝はん、あんたうちのズボンどうしてくれはりましてん、チャンとズボンはかせてますやろなぁ。

「お千代さん……、わたしですよ、鉄です。画、観てくれましたか？　いい画でしたか……。夢殿さんのね、扉口の明かりはね千代さん……、あれはあなたに貰った明かりなんですよ……　」

鉄さん……、あんたなんで泣いてくれてはるの……。あんた……、また寂しいっていいはるやないのぉ……。

微かに見えていたはずの鉄さんのお顔が次第に暗がりに堕ちてゆくと、周りの声も聞こえんようになりましてん。

ほうしましたらな、目の前がぱぁぁっと明るくなったとおもたら……、その光の中に観音さんがおわしてなぁ、こういいよる。

「お千代、進むとき来たり」と。

「お迎えでしたんかぁ……、ああ、せやったわぁ。ところで観音様……

あんさん幾つにならはったんかえ、えっ？ 満か数えかて……

そな細かいこと気にしはりますかいな、あの世の理 (ことわり) で」

■小説『異端の KARAS は闇夜に二度啼く』

２０２２-07-10 ＼ (１＼).png

藍を塗り重ねたように。東の空は山向こうの底から一日の終わりを告げる。人間の棲む集落では陽の入り刻 (とき) のお祈り時間が来たことを告げるムアッジン…お祈りの呼びかけ人が高い石の塔の上アザーンを唱えはじめた。

人間がカッパドキアと呼ぶ地。夕日が西の山陰 (やまかげ) へと呑 (の) まれる様子はただただに美しい。

陽が高いところにとどまっていれば太陽に焼かれた緑が山の麓で色濃くみせるのがこの地の日常でもある。村のはずれから東西それぞれの山にかけて広がる黄色い大きな花は人間がヒマワリと呼ぶ花の絨毯がつづく。

「ザッザッ…、カシャ、カシャ」集落の至る所に設えられた絨毯を織るための工場 (こうば) の音にヒマワリの絨毯が織り重なる。
　真っ青な空をいただき茶褐色の荒涼とした痩せた土地に黄色いヒマワリ畑がつづき、やがて緑を深め岩肌の露出が際立つ山へといたる…。

　人間が暮らす集落のあちらこちらに穿 (うが) たわれた黒い穴は、人間たちの巣への入り口だ。粗末な身なりの人間たちが膝を地につけ暗い穴ぐらから四足 (しそく) の生き物を想わせる如くにじり出てくる。
「カァ…カカァ…」そこかしこで班長が帰巣を告げる合図を鳴き上げると人間によるアザーンの声がかき消える。一斉に空へと舞い上がる我が部族。西の山の頂では太陽が一筋の線となりはじめていた。
　先導役が高いところで円を描きながら部族の動きを抜かりの無い目で追う。あらかたが空に舞い上がるのを観 (み) 止 (と) めると、東の山の麓をめがけて翼を羽 (は) たく。
　既に東の空は藍の深みを塗り重ねたように垂れ堕ちていた。天敵たちもこの日の狩りを切り上げ帰巣したのだろう、その姿は見止められない。

「爺ちゃん、まだ帰らないの？」孫のロリンが儂の頭の上、八の字を書くように飛びかいながらそう啼いていた。
「おぉ〜　ロリンか。儂はいつものように最後を見届けてからのんびり帰るとしよう。ロリンは先にお帰り。母さんも心配するじゃろう」
「爺ちゃん、今日は一緒に帰るよ」
　ロリンは深い紫を纏った羽を操ると、儂の横に降り立った。その羽色はさながら朝露に愛された山ブドウの色合いを想わせた。
「ロリン、今日もしっかりと食事は出来たかな」
この日の首尾を訊ねる。
「今日は豆とヒマワリの種…それとモグラ」
「ほぉ〜、そうかモグラか。上出来だの〜」
「このところ雨が降らないから、人間の畑では作物が枯れはじめているからね。出来るだけモグラを狙うようにって…、班長が」
「そうじゃのぉ…、食事場所の集積所でもすっかり人間の食べ残しが少なくなっているようだからのう」この周辺は普段から雨は少なく乾いた土地だった。それが今年は「干ばつ」と云えるほど雨を落とさず、このころでは人間たちの生活にも疲弊が覗 (うかが) えた。
　頭上まで藍が深く垂れ込め、星たちがその姿を顕 (あらわ) しはじめたころ。白く、まあるい月はその姿を東の山の頂 (いただき) へと載せた。それはまるで生まれたばかりの鶏 (にわとり) の卵を想わせた。なんとも美味 (うま) そうに思える。
　地を這うように穴ぐらからにじり出た人間たちは、立ち上がると二本足で歩きながらひと際大きな穴へと吸い込まれてゆく。

なんとも不思議な歩きかたをする生き物よ。二本しかない足を交互に送りながら前へと進む。更に面妖なのは羽 (はね) のない腕を交互に振って歩くという行動だ。飛べもしないのに腕を振るに何の意味があろうか。無駄に疲弊を深めるだけである。

燃える水が灯 (とも) されているのだろう。穴ぐらの中は明るく照らし出されている。人間たちも班で動く習性なのか、一つの穴ぐらには五十ほどの頭数が集い、川魚の稚魚たちの泳ぎを想わせるように皆が同じ向きに頭をそろえ、祈りを捧げている。歌うような声も漏れ出していた。

「爺ちゃん、人間は一日に五回も六回もあぁして集まって何を祈っているのだろうね…。空からの水が落ちて来るようにかな」

「先祖の言い伝えでは、昔は違う神様に祈りを捧げていたらしいがのう、今でも画の描かれた洞窟が残っているじゃろう」

「母さんが近寄るなと云ってた石の煙突みたいな処だよね……」

すっかり陽の落ちた西の空。暗くなった空を不規則に舞う闇の番人たちがその姿を見せはじめた。闇の番人たちは音を立てて飛ぶことは無い。飛ぶ方向は予測できない。我が種族のものたちなら、ぶつかるような至近距離に至ってさえ器用に方向を変えた。

様子を見ていると人間たちがペリバジャと呼ぶ「妖精の煙突」の上に黒い塊がひとつだけ舞い降りるや「クワァークワァー」と我が部族とは異なる啼き声を発した。

「来たね……」ロリンは待っていたのか、そう云うと嬉しそうに自らも一声啼いてみせた。

「カカァー　カァー」

「これ、ロリンやめないか。儂らの支配時間はもう終わっているのだ」

妖精の煙突に降り立った黒い塊の頭が動いたように見えた。目が月明かりを吸って光ったように見えた。足が動いているのだろうか。

土を削ってでもいるような音がかすかに聞こえる。カサッ…カサッ…カリ…と。

「爺ちゃん、あいつ、どうして違う種族に交じっているのだろう」ロリンはそう呟いた。

「……　さぁ、ロリン。陽も落ちた。儂らも帰るとしようか」儂はそう告げると返事を待たずに羽をばたつかせ暗くなった空へと舞った。

「待ってよ、爺ちゃん」ロリンが後に続く。

空の上から妖精の煙突を振り返り眺めると、月明かりを浴びたその姿は真っすぐに西の空を見据え、右足で妖精の煙突の土くれを蹴っていた。それは「クワァークワァー」ともう一度啼く。狩りの始まりの合図だ。

スッと広げた翼に月が明かりを注ぎ込む。その羽色は濃い紫を湛え、夜露の寵愛 (ちょうあい) を受けた山ブドウの輝きを想わせるほどに美しかった。我が部族の神なる祖先、ムギンとフギンを想わせるほどに。ただ羽の形が儂たち部族、いや種族と違っていた。羽の先端が「くの字」に折れ曲がっているのだ。

儂はその羽の姿にあの者の生きすがらを観た思いを刻まずにはいられなかった。

不規則に空を行き来する種族「蝙蝠」達に向けての狩りの合図…、闇の番人たちの縄張り時間を誇示するように啼いたそれはあたりを睥睨 (へいげい) する。

　帰巣すると部族の数を数えることが習慣 (ならわし) となっていた。トンビやタカをはじめとする天敵にやられるものも少なくないためだ。
「みなの衆、すまなんだの待たせて」
「父さん、わたしの班は無事でした」息子のキロンが安堵したように報告する。
「長老…　私のところでは二柱 (ふたはしら) ほど帰巣していません」次々に班長が報告をする。
「結局今日は七柱か…」疲れたように息子のキロンが呟くと、儂の後ろに居たロリンが口を開いた。
「カァー…、父さんきっと大丈夫さ、村に残って夜明かしをしているんだよ。明日になったら村で合流するさ」
　ロリンは父や大人たちを気遣うようにそう明るく言葉にした。
「あのね爺ちゃん…、皆にも聞いてほしいことがあるんだけど」ロリンは大人たちの話を切り上げるように言葉をつづけた。
「なんじゃ……」幾分の苛立ちが嘴 (くちばし) に滲む。
「あいつ…どうして種族の違う中に居るんだろう。僕はどうしても気になるんだ。父さんや爺ちゃんは知らないの？ 母さんに訊いてもなんか…クワクワ、クワクワ云うだけで…埒 (らち) があかないし」
「これロリン、母さんのことをそんな風にいうものではない」儂は強く咎めた。
「ごめんなさい…」
　ロリンは素直な子だった。部族の他の子たちは皆の前で意見を云える子も少なく、見て見ぬふりをすることが常だった。云いたいことは裏山の「啼き捨ての樹」に誰が書いたものか判らぬよう爪で書く。あの者についても、変り者・異物と揶揄 (やゆ) することが精々だ。しかし、孫のロリンは違った。あの「妖精の煙突」に留まる KARAS を変り者…異物…として扱うことは無かった。
　部族を纏める者として、それぞれの多様な個性を尊重できる生まれながらのリーダーの資質を備えているのだろう。
　息子夫婦は自分たちの子供ロリンの問いには答えなかった。
「……さぁ、明日も早い。自分の梢 (こずえ) に戻って寝るのだ」儂はそう皆 (みな) を促した。
　夜明け前、息子のキロンが血相を変えてわたしの梢を揺らした。
「父さん、ロリンが居ないんです。ロリンが」
　あとを追ってきた嫁のニヒトが息子の後ろでクワクワ云いながら羽をバタつかせている。
「…いつからいないんだ？」
「わかりません。梢に戻ったのは一緒だったのですが、出がけ準備の合図を啼き上げようとしたところ、もう梢には居なくて…」

「……　村におるじゃろう。夕べ、誰も答えをくれないものだから…ロリンは自分で答えを探しに行ったのかもしれんのぉ」
「それは……父さん…、どうしたらいいのでしょうか、夕べは雲も深く垂れ込めてましたから…」
「キロン、お前の息子は利口な子じゃ。鳶 (とんび) が鷹 (たか) を生んだと云われるほどにの。仕方ないじゃろて。知る時が来たのなら抗 (あらが) うことは出来まいて。殊更 (ことさら) に事を荒立てぬことじゃ。ほれ云うてる間にも先頭が村に向かいはじめようて」　東の空、山の頂が白 (しら) んできた。

【あいつは僕と同じ種族の仲間だよ。なのに何故違う種族の蝙蝠と一緒に居るんだろう。今日こそ話を聞いてみよう。それにしても今夜の雲は重くて低いよ…。暗いよ…。方向が判らなくなるよ…。こんなに暗いんじゃ食事だってさがせやしないよ。夜は暗いから仲間だって見つけられやしない。なのにあいつはどうして闇の番人種族の蝙蝠たちと居るんだろ……。よぉし、今のうちに雲の上まで出てみよう。月があれば山の影も見えるだろう。山さえ見えれば何とかなるさ……。よし、雲の色が白っぽくなってきた。あと少し……。
　出られた！　山も見える。月は僕の味方をしてくれてる！　月が僕の真上だよ。星がたくさん出ている…、どれ程出ているのだろう。行きすがら数えてみようか……。ム・ニ・ンサ・マ・フギ・ン・サマ…、イチ末裔。ムニン・サマ・フ・ギ・ンサマ…、ニ末裔…二十か……、チェッまだまだあるよキリがないや。でも空が暗くて静かだ。これならトンビやタカにも襲われることは無いだろう。
　爺ちゃん凄いよ。夜の月はあんなに白く光るんだ。空や山を飾るように散りばめられた星たちはあんなにも沢山あって優しく瞬く。
　あいつはずっとこの景色を見ていたのか。
　でも、食事はどうするのだろう。食事はみつけられるのだろうか……、僕だったらきっと無理だろうなぁ。この辺かな？ そろそろ雲の下へ降りてみよう。あっ！　ようし蝙蝠種族を見つけたぞ。もう少し南…、居たっ！　あいつ、また土を蹴ってる…。
　どうしよう…、直接隣に降りたら驚くだろうな。攻撃されるかもしれないし。蝙蝠たちも驚いて襲ってくるかもしれない……。しょうがないや、まずは上から声を掛けてみよう】

「カー、カカァー」
「なんだお前クワァー。何をしに来たんだ。お前たちは寝ている時間だろう？ 今は俺たちの支配時間だぜ」
「僕だけなんだけど、横に降りてもいいかな」
「好きにすりゃいいさ…でもチョット待てよ、仲間に何でもないっていう合図を送るから」

「うん」
「……クワッカー」
「ありがとう…凄いね、あんなに沢山いたのに一声で居なくなっちゃうなんて…、えっ？ 当たり前？　そりゃぁ同じ種族だったら分かるけど、君は僕と同じ種族じゃないか…、なのに一声で…」
「馬鹿馬鹿しい…、そんな話をしにきたのかい？ 種族だ部族だって執着するからいつまでも争うんだろう？ 蝙蝠たちは自分たちから争いを仕掛けることは無いのは知ってるよな」
「うん……、いつも僕の種族がけしかけてるのは知っているよ」
「だいたい俺がこうして無事に育ったのだって、卵を置き忘れたお前たちの雌の代わりに育ての蝙蝠母が俺を温めてくれたお陰なのさ」
「エーッ！ 君は蝙蝠に育てられたの？」
「そうさ……、だから俺はお前たちを見る度に腹を立てていたんだ。でも蝙蝠母が俺に云うんだ。お前は神様のお使いの末裔なんだから心を広く持たなければね…って。だから俺も我慢することにしたのさ」
「神様のお使いの末裔？ それって、ムニンとフギンのこと？」
「あぁ。なんかそんな名前だったかな」
「じゃぁ、君 (きみ)、僕と同じ部族の子じゃないか…、僕はロリン。部族の長老の孫。君の名はなんていうの？」
「俺はベガ。俺の蝙蝠母は部族のシャーマンなんだ。結構長生きしてんだぜ」
「ベガ…、君の羽の色…、僕と同じ色だよね。でも、羽の形がチョット違うよね」
「あぁ…これか。自分で折ったんだ。何でかって？ 蝙蝠族の方向転換についていけなかったから、嘴 (くちばし) で銜 (くわえ) て折ったのさ。おかげで急旋回やホバリング転回も出来るんだぜ……」

　東の空が山の頂を橙色に染めはじめた。村までもう一息だ。闇の番人たちが西の森に向けて帰って行くのが目に入る。
　しんがりを飛んでゆくのはあの子だろう。少し曲がった羽の先を器用に使いながら右へ左へ上へ下へと飛んで行く。と、それは左へと急旋回をみせると滑空体制に入った。
　早い！ フクロウが若い小さな蝙蝠を狙っていた。それは自らの体を矢羽根と化し嘴 (くちばし) からフクロウに体当 (たいあ) たりをしてみせたのだ。
　流石 (さすが) の夜の知恵者、フクロウも堪らず大きな翼を翻し山に向かって逃げ飛んで行く。
「やりよるわい。どうやら育ての恩は返せているようじゃの」儂はひとり呟いた。
　息子夫婦がロリンを見つけたようだ。
　人間が妖精の煙突と呼ぶ岩の上、留まっているのがロリンだろう。息子夫婦はロリンの頭上で啼き叫んでいる。

「よさないか。無事に見つかったのだから良いではないか。あとは巣に戻ってからにすればよいだろう」
　儂は息子夫婦のそばに行くと、咎めるように嘴をはさみロリンの留まる妖精の煙突に羽をおろした。
「爺ちゃんごめんなさい。心配かけて」ロリンは謝罪をみせた。
「心配をかけるようなことはするべきではないな……。それで、どうだった。目的は果たせたのかな」
「うん。面白かったよ。あいついい奴だったし頭も良くって、僕たちが知らないことをたくさん知っているんだ。でも、チョット変わったやつだよね……。あいつの羽が曲がっている理由も分かったのだけど。それから…あいつ蝙蝠種族のシャーマンに育てられたんだって云ってたよ。で、ムニンとフギンの末裔だって」ロリンは一気にまくし立てた。
【そうか…、やはりそこまで知ってしまったのか…。どうやらあのシャーマンの蝙蝠婆さん…、上手に育ててくれたようだのぉ。さて、あとは帰ってからにしておくとしようか。どの道、按配 (・・・・) も (・) 頃合い (・・・・) じゃて。息子夫婦と話をしてから決めるとしようか】
「楽しかったようじゃの。良いか。その陰で心を痛める者たちが居たことは忘れるでないぞ。お前もムニンとフギンの末裔。智慧と記憶を掌 (つかさど) る使い魔の末裔じゃ。そのことをよくよく心に留めておきなさい。ほれ、飯じゃ飯の時間じゃ…、あとは帰ってからじゃ」
　そう云いながら目線を足元に移すと、自分の立つ足元の土が抉 (えぐ) れたように掘り込まれていることに気付く。
【ここはあの子が立っていた場所なのか…、何故…、何故ここだけが掘り込まれたここだけが黒く濡れている？　いや…魔坂 (まさか)…】
「うん。爺ちゃん。じゃあ食事に行ってくるよ」ロリンはそう告げると妖精の煙突を蹴り上げ空高く駆け上がった。
「ほう…、ロリンお前もか…」そこの岩肌は確かに湿り気を帯びていたのだが、登り始めた東の空の太陽が早くもその湿りを乾かしはじめる。儂は左足でその痕跡を隠すように掻きならした。

　ムアッジンが朝のお祈り時間の到来を告げるアザーンを唱えると、谷間には東の山むこうからの朝日が差し込む。あちらこちらで我が種族の啼き声が響いていた。食事の取り合いなのか、天敵にでも襲われているのか…仲間同士で食事を巡って争う姿も目にした。
　穴ぐらからは、人間たちが四足動物のようににじり出てくると飛べない腕を振っていた。
【おっ…　あれは蝙蝠種族のシャーマンの婆様ではないか…、あんなところで今頃何をしているのだろう。仲間はみな帰巣した頃合い。あの土の塔は赤ん坊を抱いた女の神様が描かれていた塔だ。なんで今頃あんな中に入ってゆくのか】後をつけるつもりは無かったが、ロリンとあの子のこともあり、塔の中へと入ってみた。
　飛び交うには狭かった。壁には人間達が描いた赤ん坊を抱く女の神様の姿や、人間の

背中に羽をはやしたおかしな鳥 (とり) 種族 (しゅぞく) の画が描かれていた。
　天井に目をやると、シャーマンの婆様が天上に足でつかまりぶら下がるように羽で顔を隠し休んでいた。
「婆様…、蝙蝠の婆様…、休んでいるところ申し訳ないが少し時間を貰えるだろうか」
「何だい、誰だいこんな朝早くから。わたしゃ今から寝るんだよ。こんな婆を喰ったところで、しわくて食えたもんじゃないよ。もう少し脂ののった餌を探しに行きな…」
「婆様、儂じゃよ、ドゥワじゃ」
「なんだあんたかい。どうしたのさこんな早く。ハハァ……、あれじゃろ…、あの子達のことで来たんじゃろ」蝙蝠のシャーマンの婆様は見透かしたように嬉々としてそう云った。
「夕べから今朝にかけて随分話し込んでいたからね、あの子達」
「婆様、あの子達がどこまで話をしていたか分からんじゃろか」
「相変わらずお前様たちは都合が先行するのぉ…、そうではないだろう。使い魔の末裔だか何だか知らぬが、常に気にするのは体裁と自分の都合ばかりじゃ」蝙蝠のシャーマンの婆様は歯に衣着せぬ物言いで儂を責めた。
「いやこのとおり申し訳ない。確かにあんたが云うように、儂らはあんたに借りがある。後にも先にもそれを抜きには話は出来ない。婆様、ずっと天井を見上げていると首が痛くて仕方がない。チョット降りて来てはくれぬか…」
「爺さん。あんたなにかい、この朝日が昇って凡てを晒 (さら) し出す時間に、私に地に降りろというのかい？　　ネズミや蛇にでもこの老骨を差し出すつもりかえ？」
　これはいかん。藪蛇である。
「婆様悪かった。今そこまで飛んでいくので許してほしい」
　儂はそう云うと蝙蝠のシャーマンの婆様がぶら下がる天井付近の張り出しに身を折るようにねじ込んだ。人間たちが蠟燭 (ろうそく) を灯す場所なのか、足元が気持ち悪い。
「フン…、なんの用か知らないけどサッサとしておくれ。あたしゃ眠いんだよ」
「婆様…、まずはあんなに立派にあの子を育ててくれたことに衷心より礼を申し上げる。ありがとう」儂は頭を下げた。
「何を今さら言ってるんだい。元はと云えばお前さんの息子の嫁が巣への帰り間際、急に産気 (さんけ) づいて妖精の煙突の上で卵を産んだことがはじまり。嫁しかいなかったから抱卵できたのは一つだけ。もう一つの卵……、あの子を持ってはいけなかったのさ。そこに首尾よくあたしが通りかかったから抱えて温めてやっただけのこと……、それもあたしゃ、お告げを聞いていたから通りかかることもできた。だけどね、ベガは本当にいい子に育ってくれたよ。今じゃあたしの部族の中でも皆に頼りにされて…。あぁ～判っているさ、いつかはあんたたちの元に帰る日が来るぐらいのことはね。だけど爺様、あたしゃね、口が裂けても云いたかなかったけどね。他の種族の手に塗 (まみ) れたKARASの恐ろしい末路など」
　儂は嘴 (くちばし) を差し挟むことなく蝙蝠のシャーマンの婆様に話をさせた。儂らの種族は他の種族の匂いがついたものを受け入れることは無かった。卵なら母親自らが割る。雛なら父親自ら巣から蹴落とす。それが部族の暗黙の了解。
　一度蝙蝠種族の手が及んだものであれば、部族に戻るためには自ら戦い道を開く時を待つしかなかった。

それがベガの宿命であり、双子兄弟のロリンとその親、キロンとニヒトの抱えた運命だった。
いつの間にか人間の洞窟の中には明かりが灯されていた。壁に描き込まれた赤ん坊を抱いた女の神様の前では、蝋燭の炎が風に揺らいでいる。人間に羽をはやしたおかしな鳥種族が女の神様の脇を固める。明かりを吸った故なのか、暗がりに浮かぶそれらの姿はただただに美しかった。儂はその美しさにしばし見入った。婆様の存在を忘れたように見入った。いや祈ったのかもしれぬ。
「さぁ、爺様。あんたどうするつもりじゃ。あんた自分で判っていると思うが、もうそれほど長くは飛べんよ。それとあんたも薄々気づいておるじゃろうが、あの子達…、数百年ぶりの生まれ変わりぞ」
「あぁ……、少し前からなんとなくな。今朝、はっきりと判ったわい…、飛べなくなることも、あの子達のことも……。婆様、どうじゃろう、ここはひとつ儂に任せてくれんか」
「任せ云われて落としどころも判らずに、任せた云えると思うてかこの戯 (たわ) けKARAS め」
「相変わらず厳しいのぉ〜(笑)　こういうのはどうじゃろう……」

女の神様が描き込まれた洞窟をあとにすると、外では太陽が頭上に昇っていた。薄くなりはじめた羽を広げ地を叩くと体が浮いた。
祈りを終えた人間たちが頭を寄せ合い話し込んでいる。どうやら干ばつによる被害について相談しているようだった。
【だいぶ酷いようじゃのぉ。人も死にはじめているという話も聞こえてきている。儂たちの部族はそこまでではないが…、他の部族では人の死肉をついばんだ KARAS が人間に殺されたという話も伝わり始めている。ほかの土地の人間たちの間では、鳥葬という儀式もあるらしいが、儂たち種族は厄介者のようだ。さて、なんとか雨が落ちてくれればよいが】
空の上から川の水や用水路の水の具合を眺めても、渇水は明らかなようだった。
【これは部族で餌場についても相談しなければならぬかのう。山裾の森は今のところ水の心配はない。が問題はこの人間たちの生活でもある。これまで持ちつ持たれつでやってきた一面もある。ネズミやモグラといった作物に害なす動物が減ったことに、一部の人間の間では木彫り KARAS を祀 (まつ) り上げ、信仰の対象として祈りを捧げるものも居る。雨が欲しいところだ】
日が陰ってきた。地面から空に向けて吹き上げる乾いた風に緩みがみえはじめる。雲が広がりはじめていた。風が変わる……。地面からの風が緩むと羽を叩かなくてはならなくなる。儂のような年寄りには些かこたえるのだ。「どれ、一度降りて休むとしようか」目線を地上に移し着地するに手ごろな場所を探した刹那 (せつな)、儂の頭上を二つの影がかすめた。
「グガワァ…、いかん！ 抜かったわ！」声に出し方向転換を試みるも、二つの影がかすめた際に大きく強い羽が儂の羽を折ったようだった。自由がきかない。失速する。このま

までは乾いた谷間に体を打ち付ける。方向は選べない。まずは水平に、少しでも怪我を小さくすることが……。儂は傷んだ羽を我慢して広げ、かすめた二つの影を目で追った。
　いた。あれは…鷹だ。そしてもう一つの影は……、雲間から覗いた太陽を背にしたそれの大きさは空を駆け降りる羽のある馬の如くに見えた。まるで金色の鬣 (たてがみ) をもつ馬だ。
「あれは……」羽を背負った馬…そう口に出しかけると、孫のロリンが大声をだした。
「爺ちゃぁーん…大丈夫―」少し離れたところから、ロリンが儂の元めがけ飛んできた。
「ロリン…儂は大丈夫じゃ。羽を少しやられたがの」儂の目は空でまみえる二つの影を追っていた。
「爺ちゃん、もう少しだ。あそこに降りよう。右だね、怪我した羽は右だね？　　よし、僕が右を支えるから、爺ちゃんは左の羽で舵を取って！　　いくよ！」
「すまんのロリン」
　返事をしないロリンをみると泣いていた。嘴をギュッと噛み締め泣いていた。地面へと着地し折れた羽をたたむと、二つの影を求めるように空を見上げた。鷹はその姿を消したようだった。太陽に照らされた山ブドウの色合いを想わせる羽…、その羽の先端はくの字に曲がっている。
【さっき儂が見たものは一体…】そう考えていると、それは儂たちをめがけて着地した。
「ベガ！　　どうしてこんな時間に君がここに居るんだい？」ベガはそれには答えず儂に言葉をかける。
「爺さん…　大丈夫かい？　　危ないところだったな」そう云うベガの体中の羽は戦いの激しさを物語るようにささくれ立っていた。
　更にベガは左目をつぶされていた。儂を助けるために自分の目を差し出したのだ。
「面目ないのぉ。ロリン。儂はベガに助けられたのじゃ。ベガ、済まぬ。目を潰されたか」儂がそう告げるとロリンは嗚咽を漏らし泣きはじめた。
「そう。良かった。ありがとうベガ。目はどうなの？ 見えないの？ 怪我しちゃったの？」
「なぁに、二つあるうちの一つが減っただけさ。ちょっと痛いけどな、俺の婆様が帰っていないって皆心配してたから探しに来たんだけど、そしたら爺さんが鷹に狙われてるのが見えたから……。爺さんがロリンの云う長老かい？　　俺のシャーマンの婆さんとも知り合いなんだってな…」
「うん。僕の爺ちゃんだよ」ロリンが告げた。
「……ベガ、儂はお前の爺さんでもある」儂は告げてしまった。蝙蝠のシャーマンの婆様と交わした作戦など何の役にも立たずに。儂は告げていた。「爺さん？」「爺ちゃん？」
「そしてお前たちは双子の兄弟じゃ……」

「なんだいなんだい騒々しいねぇ、カァーカァークワークワー。誰だい蝙蝠の眠りを妨げるのは……、おや、ベガ。何してるんだいこんな時間に。お前、その目はどうしたんだい！」
「大したことねぇよ。それより、いつまでも帰ってこない婆ちゃんを探しに来たんじゃないか」
「そりゃ済まなんだねぇ。にしてもその目…おまえ潰れちまったねその目…。おや、そっ

ちは爺さんとお孫さんかえ、なんだってんだよ皆でこんな時間に……、爺さん、あんた魔坂 (まさか)……」
「婆さん…申し訳ない。たった今凡てを話してしまったところじゃ。のっぴきならない事情が降りかかってのぉ、本当にすまん。それからベガの目じゃが、儂を鷹から助けるために怪我をしたんじゃ。許してくれ」
「ふん。どうせそんなところじゃろう。それも KARAS の勝手というものさ。さて、ではこれからどうするかという話には、私も混ぜてくれるんだろうね爺さん」
「僕たちが兄弟ということは、シャーマンお婆さん。あなたは僕にとってもお婆ちゃんです。だから…僕は爺ちゃんと婆ちゃんに云いたい。まずは僕とベガで話をするよ」
「おやこの子。爺さん、血は争えないねぇ。しっかり自分を主張する子じゃないのさ」
「俺もロリンと話をしてから道を探す」
「この KARAS どもと来たひにゃ、好きにおしよ。ただベガ判っているね…、楽 (らく) じゃないよ」
「もちろんさ。俺は婆ちゃんたちも守る」ベガはそう云うと足で地面を掻き削っていた。
　どうしたことか、そのベガの足元からは水が滾々 (こんこん) と湧きい出、たちまち小さな水たまりをつくりはじめたではないか。
【ほお…、やはり。この子の足はグングニルの杖か。さしづめ湧き出す水はミーミルの泉となるやもしれぬ。この子達がムニンとフギンの生まれ変わりであるのなら自分の目を犠牲に命あるもの達の役に立つのも定め。もう少しゆく末を眺めてみたいものじゃて】
　三羽の KARAS と一匹の蝙蝠のやり取りを眺めていた人間たちが水たまりを見つけて騒ぎだしている。飛べない腕を振りながら。
　儂は折れた羽を引き摺り、蝙蝠婆さんとともに「赤ん坊を抱いた女の神様」の穴ぐらへとその身をあずけた。

了

■小説『 細 氷』17 才のダイヤモンドダスト

ルノワール-２.png

昭和 ŒŒ 年１月 ŒŒ 日
深夜二十一時三十分。

北緯四十三度に位置する小さな町のバス停。一人の若く美しい女が降り立つ。バスが若く美しい女を運んできたのだ。
バスは雪が堆積したバス停に若く美しい女を吐き出すと、二十一時半の深夜だというのにガラガラというけたたましいエンジン音を響かせ走りだす。降車客はこの若く美しい女ただ一人だった。もちろん乗車する客などはいない。
タイヤに巻かれたチェーン。所々に露出したアスファルトを噛む音が深夜の町にコダマする。
「チャイチャイチュリチュリ……チャイチュリ」と。時折バスのテールランプ、ブレーキ灯が後ろ髪を引かれたようにその赤い明かりをともす。パク……パクッと。
「こんな時間にこんな所で降りるのか」ブレーキ灯の点滅はそう云っているように思えた。

若く美しい女は取り残されたようにバス停に佇んでいる。
白いEMBAのヤッケに千鳥格子のキュロットスカート。ロングブーツ。白と紺、赤の毛糸の帽子には雪の結晶柄が編みこまれていた。肩下十五センチまで伸びているであろうストレートロングの髪が三日月の明かりを浴びて艶めいている。雪明りと相まったそれは、深夜、寝入りばなの町に相応しく思えた。
若く美しい女はバス停の前で革手袋をはめた右手を鼻と口の前に持ってゆくと振ってみせる。手を振っているように見えた。一瞬隠れているのがバレたのか。そう思ったがバスが残した排気ガスに噎せ返ったであろうことが見て取れた。

寒冷地特有のバス停は掘立小屋を思わせるほどの粗末な造りだった。
髪の毛をアップにし割烹着を着け鍋の中からカレーを取り出すおばさんの看板が錆びつき劣化したのだろうか、時おり吹き上げる風にあおられガシャンバシャンと哭いていた。強いつむじが粉雪を巻き上げ深夜の町を奔放に行き交う。
俺は掘立小屋バス停の陰にいた。
所々破れたバス停の壁の穴から若く美しい女を見ていた。盗み見ているのではない。脅かしてやろう。が、俺の目論見は経験したことの無いような胸の高鳴りを前に頓挫した。期待と不安が交錯した。今夜、これからのことに思いを向けるだけで氷柱は灼熱をともないその先端からは溶けた雫をあふれさせる。
除雪車でも通った後なのだろうか。道路わきには堆く(うずたかく)雪が寄せら、若く美しい女は除雪された後であろう雪に黒く滲んだ軽油と灯油の混合排気ガス特有の痕跡をみつけると、黒く煤けた雪を足で覆い隠すように掻きならしていた。

「カヤ……」
若く美しい女がバス停に降り立ってから三分とは経っていなかっただろう。俺はその女の名前を呼ぶ。女は元林茅野十七歳、高校二年生のクラスメートだ。
「もう……、こうくん、寒い〜すんごいシバレルね」
茅野は驚くわけでもなく嬉しそうに俺の顔をみた。が、その目元は赤く腫れあがり、ふたえの大きくエキゾチックな輝きを湛えていたであろう瞳は充血をみせている。若く美しい女の泣き顔というものを見たことは無かった俺はそのあまりの美しさを目の当たりに言葉を失っていた。
【カヤ、おまえ帰るべきだったよ。バスに乗り遅れたから今日は帰るね……そう電話を入れれば済んだはずなんだ。それで今まで通りだったはずなんだ。今まで通りお前の親友、俺の彼女のメグの彼氏のままで居られたはずなのに】
俺は茅野をほんの少しだけ恨んでいた。

真冬の寝入りばなの町は数分と待つまでもなく空気が凍る速度をはやめる。茅野のまつげが白く凍りはじめていた。
「カヤ、お前のまつげ折れるぞ……」俺はそう云いながら自分の右腕をまくり上げると、

腕の内側を茅野の目元に近づけ「早く目をつけろ」と促した。茅野は目を閉じると腕を両手で捧げ持ち自分の目に当てた。
「ありがとう……、溶けたとけた」そう云うと目を腕に押し当てたままゴシゴシッと左右に振り大きく鼻をすすって星空を見上げる。
「こっちまで来ると星が綺麗だね」
「悪かったな、田舎で」
　茅野は頬を伝う溶けた水滴を皮のスキー手袋の背で拭いとりながら笑ってみせた。
【ヤバイなぁこれ、最悪のピンチだろ、若い女の泣き顔って初めてみたけど、なまらめんこい。あぶらっこ過ぎるだろ。あの泣き顔みせたあとにニコってするのは反則だべ】
　俺の頭の中では奇跡とも呼べる印象をもって若く美しい女の泣き顔と笑顔はその存在を刻んだ瞬間となった。
木村浩介十七歳の俺は北緯四十三度の地方都市のはずれに住んでおり、この夜、急遽自宅に来ることが決まった元林茅野をバス停まで迎えに来たのだった。
二人の吐く息が凍る。
中空を漂い、ときに絡まり合いながら……
重さを感じさせるようにそれは凍りついた雪の上に堕ちる。
月明かりの下、キラキラと輝きながら。

北緯四十三度の地方都市のはずれにある町。
時刻は深夜二十一時三十九分だった。

■

　自宅の電話が両親不在の静まり返った茶の間で鳴る。両親は母方の実家をたずねたようであり今晩は帰らないとの書き置きが残されていた。「にいちゃん。電話ぁ」階下から弟・雄二の声が告げる。
　俺は反射的に壁掛け時計に一瞥をくれた。「五時過ぎ……誰ヨ……」万年布団に横たえた体を起こすと茶の間への降りすがら「誰ヨ」と雄二に聞く。
「知らねえけど、女の人」雄二は面倒くさそうに返事をしてみせた。
【メグか……】寝ぼけた頭の中、相手を特定しようとする考えだけが逡巡。俺は電話台からやにわに電話を手にすると「もしもし」と声にした。
「こうくん？ わたしカヤ。今喋っても大丈夫？」電話はクラスメートでメグの親友の茅野からのものだった。
「大丈夫だけど……、カヤ、おまえ今外か？」外を走る車の音やクラクションの音、パトカーの走り抜ける音が受話器越しに聞こえる。
「うん……バスターミナルの公衆電話からなの」
「急ぐのか？　　自宅に帰ってからかけてくれてもいいぞ。どうせ今日は両親もいないし。おまえ帰る途中じゃないのか？」
「ありがとう、じゃぁ、三十分ぐらいあとにもう一度かけるね」
「お〜」そういうと俺は電話を置いた。

【なんだ……カヤから直接電話なんかかかったことは今まで一度もなかった。メグに電話をしておくか、いや、ひょっとしたら修一との間で何かあったんじゃないのか。話が彼氏がらみだから仲の良い俺にまず電話をして来たとすると、カヤからメグに話をするのを待つのが筋だろ】

茶の間でミカンを喰いながらテレビを見ていた雄二が「メグちゃん？」おあいそなのだろうそう訊ねる。「いや、双子の片割れ……カヤだった」そうは言ったものの雄二はカヤのことまでは知らない。

メグとカヤは双子のように似ていると学校でも評判だった。カヤは育ちの良いお嬢様タイプ。メグは平均的な家庭で大切に育てられたごく普通の真面目な女の子だ。二人は中学の時からの親友であり、俺はメグと付き合っていた。付き合いも九カ月を数えるまでになっていた俺たちは、一周年には一泊で温泉にでも行こうという計画を立てるほど仲も良かった。

そんな俺たちの付き合いは学校の先生たちの間でも公認の関係となっていたのだが、その理由がふざけたものであり、俺がメグと付き合うなら俺の矯正になるという思惑がはたらいていたと担任から聞かされたことがあった。そういう意味においては担任達の思惑は的を得ていたといえる。たしかに俺の私生活は矯正された。

折も折、メグの兄のお嫁さんが勤めるスーパーの食料品売り場でのアルバイト募集の話しを聞きつけたメグが俺にバイトを勧めた。

「こうくん、バイトするなら手伝って欲しいって、義姉が云っているけどどうする？」と。そんなことから俺は学校帰りに自宅とは遥かに反対方向のスーパーでアルバイトをするようになっていた。メグの家はバイト先からも近かった。俺は頻繁にメグの家に出入りをするようになった。建築関係の自営業を営んでいたメグの両親からも「こうくん」と呼ばれ、随分可愛がられ時折泊まるようにすらなっていたほどだった。メグの両親は俺たちの交際を温かく見守ってくれていたようだ。

時計の針が夜の六時を指す少し前。茶の間の電話が鳴った。

「もしもし、木村ですけど」

「こうくん？　カヤ……、ごめんね何回も」

「なんもよ、したっけ、どしたのよ」

「あのね、修ちゃんと別れたの。こうくん仲良かったでしょ。だから伝えておこうと思って……」茅野の言葉からは、俺が修から何か聞いていないか確かめたい思惑も感じられた。

【やっぱり。あれこれ電話をして詮索しなくて良かった】俺はそう思った。電話口の茅野は既に泣いていた。

茅野の話しでは、冬の羊の放牧風景を眺めに行きたいと云い出した茅野は、修はと市街地にある有名な展望台公園へと行ったらしい。どうやらそこで修が切り出したようだっ

た。なんでも、好きな女のが出来たから別れようと。

　俺は気がかりを茅野に訊ねた「んで、おまえ、メグには話したのか？」と。
「まだ……。明日にでも云うかもしんないけど、整理つかないっしょまだ」
「だべなぁ……。で俺になにか出来ることあるのか……」
「はなし聞いてほしいだけ。分かってくれるの多分こうくんとメグしかいないし」
「……　チョット寒くて遠いけど来るか？」
「いいの？　行っても」カヤの返事に戸惑う様子は見られなかった。むしろそう云われることを待っていたようにすら感じられた。
【そりゃぁ今日の今のことだ、独りでは居たくないよな……】
「いいよ。両親もいないし俺もまだ飯食ってないから、カヤが来たら何か作ってやるよ」
　俺はそこまでを告げると、バスに乗る直前に電話を貰えるように伝えると受話器を置いた。受話器を置くと急にブルブルッとした震えが俺の体を貫く。まるで電気が走ったような痺れ、震えだった。【はぁ？　　バッカじゃねぇの何妄想してんのよ、あり得ねぇし】一瞬よぎった妄想が背徳の二文字を伴っていたことには気付けた。

　弟の雄二は今晩も友人の中杉の家に遊びに行くと云っていたことを思い出す。頭の中で考えることと口に出す言葉、体のバランスがまったくおかしなことになってきていることには気づかない。
　俺は茶の間の物入れから掃除機を取り出すと二階に持って上がり部屋の窓を開け放し掃除機をかけた。煙草くさい部屋はとても十七歳の部屋ではなかった。ブラバスのオードトワレを部屋中にふる。
　壁に設えられた本棚には学校の教科書と参考書、それだけが俺の身分が高校生であることを担保していた。あとは正常な高校生が読むことは無いであろう週間宝石と書かれた厚さ３センチほどの小説集が本棚を埋めている。
　寧ろ教科書や参考書より週刊宝石の方が多いということに大人たちが気付いたら何某かの病気を疑ったかもしれない。
「２ミリ５ミリだな。まぁ掃除機かけて、客布団一組と毛布だけ用意しとくか。流石に灰皿ぐらい洗っておくか。なんか、ジュースあったべか？」台所に据え付けられた冷蔵庫の脇には炭酸飲料数種類が箱に入れられ積まれていた。
　二階の自室にコーラとグラスを持ち込み、コーラはベランダの発泡スチロールの箱に放り込む。

　時計を見ると時刻は二十時を表示していた。
　階下から雄二の声が「にいちゃぁん、行ってくるわ」と響く。
「悪いことすんなよ。」一応兄らしい一言を告げるのだが、この期に及んでは今一つ説得力に欠けていると思えた。心の内を読んだかのように雄二は「にいちゃんもね」と返す。

「るせぇ、るせえ、早くいけ」「じゃぁねぇ」
　さて、これで落ち着けるのか。今のうちに風呂でも入っておくか。なぜ風呂に入ろうとする自分が居るのかに頭は向けない。既に思考がサル化していた。風呂場へと歩みを進めた途端、茶の間の電話が鳴る。電話は母親からのものだった。
　あたり前の会話しかない「ご飯は食べたのか」「雄二は何してる」「火の始末だけは気をつけろ」毎度刺激を受けることの無い色気も艶もない言葉だけが繰り返される。そのたびに俺は【うちのお袋はなんのために小説を読んでいるのか、文学的センスの欠片もない】そう思うことが常となっていた。
「なぁんもねぇよ、はい、じゃぁゆっくりしてチョウダイ」俺はそう告げると電話を置いた。
　電話を置くとすぐに電話が鳴る。
【うるせぇなぁ】
「はぁい！　なによ！」言葉がぞんざいになる。
「えっコウクン？　　メグだけど、今、まずかった？」
　電話はメグからのものだった。俺は慌てて母親から電話があったことを伝え、またかかってきたものと勘違いをしたことを告げた。茶の間の時計は既に二十時二十分を指していた。メグとの電話は一時間に及ぶことが珍しくはなかった。「なんの用よ」と聞くことはできない。いや、そもそもこのタイミングで電話が来るということに俺は不安をおぼえた。
【俺は云うべきなのか。でも、カヤがメグに伝えていなかったとするとどうなる。カヤの立場がおかしなことにならないか?　いや、カヤがメグに伝えていたとして、俺がメグにそのことを今云わなかったとしたら……、いや違う。カヤはメグに今夜のことは絶対に云っていない。(根拠に乏しい面妖な自信と思考の方向性に不調和を覗かせていることには気づかない)　従ってメグはカヤが来ることは知らない。てことは俺はどうなる？】
俺はメグとの電話をしながら、とうとう問題の本質に辿り着いた。それはこの時点で抜き差しならないことに進展を見ることが約束された瞬間となったのだが、サル化した俺はこの期に及んですら楽観的に構えていた。
「メグ、風呂が沸いたから風呂に入ってくるかなぁ」嘘をつく。メグはなんの疑いも持たず「うん、また明日ねェ」と明るく告げると電話を切った。

時計の針は二十時四十分を指していた。

■

【これは……ひょっとして俺はピンチじゃないのか。まてまて、おかしいって。なんで俺がピンチになるんだよ。カヤが修と別れてその別れ話に付き合って、メグの親友のカヤの話しを聞くだけの俺がなんでピンチなんだ】サル化した俺はこの期に及んでさえ本質と向き合うことを避け、“不条理感” を弄んでいるに過ぎないことには目をつむた。

電話の呼び出し音が響く。時計を見ると二十時五十三分。
「こうくん、かやだけど、五十五分のバスに乗るね、じゃぁバスもう出るから切るね、したっけあとで」茅野は用件だけを云い残すと一方的に電話を切った。俺は時計を見ながら到着時間を割り出す。
【カヤ……、云えねえよなぁやっぱり来るなとは。そりゃあ云えねぇだろ。なんだか嬉しそうにしてたしなぁ。聞いてほしいよなぁやっぱり。だけど、一番の問題は二人でメグに何も言っていないことだろう。カヤ、おまえどうするつもりなんだよ今夜のこと。メグに秘密にするつもりなのかよ。おいおい待てマテ、俺は客布団を用意したよな、いやこれはダメだ。取り敢えず客布団だけ雄二の部屋に移動しよう。チョットこれはさすがにおかしい】俺は平常心をとうの昔に失っていた。舞い上がりテンパっていた。既に背徳感は俺の思考を鈍らせ俺の背中を押している。

俺は二階に上がると客布団を雄二の部屋に運んだまでは良かったものの、自分の布団のシーツと布団カバーは真新しいものへと変え、部屋の隅にたたんで置いたのだった。空気の入れ替えをすべく開け放っておいた窓からは夜の凍てついた空気が流れ込んでいた。
【俺……、やっぱ誘ったのは俺なんだろうなぁ。ただ、二人とも簡単に考え過ぎていたよな。聞いてほしい聞いてやりたい、たったそれだけのこと。あいつとの間に何もなかったとしても、たぶん、二人ともメグには云えないだろう。きっとカヤも今夜のことは二人だけの話しにしておいて欲しいと言うだろう】
結論を先送りにし、脳が勝手に正常な判断を放棄したに過ぎなく、快楽という都合の良い可能性が残された方を選択をしたに過ぎなかったことには目を瞑ったままだ。

【でも、話を聞いてやってバスに乗せて返せばいいんだろう。簡単なことだ。これで最悪のピンチは回避できるだろう。そうだ最終のバスを調べておこう。最終バスは二十二時三十五分って、なんだよ一時間しか話せないのか。まぁ仕方が無いか。一応、最初にカヤには伝えておこう】
もしも茅野にバスの時間を聞かれた時には答えられるように用意しておくのが最善であり、最終のバス時刻を事前に伝えておくことがルールのように思えた。
俺は、入念に茅野を迎え入れる準備を整えながら、起きていないことについて様々な角度から一人反省会を催していたのである。

時計に目をやると時刻は二十一時二十分を指していた。

■

北緯四十三度の地方都市。それも街はずれの小さな町の夜は早い。特に冬場の夜の訪

れは一層と早い。二十一時三十分は既に深夜時間帯であり町を歩く者もまばらであり行き交う車もほとんど無いのが当たり前の景色だ。
　元林茅野をバス停まで迎えに来た俺は茅野の前に立つと自らの右腕を捲り上げ、白く凍りはじめた茅野のまつげの前まで差し出した……「ありがとう、溶けたとけた」
　夜の空を見上げ弦月をともなった星たちを二人で眺める。不思議だった。メグとでさえこんな景色は見たことはない。二人の距離はこれまでで一番近い。二人の吐く息は月明かりを受けキラキラと輝きながら宙を舞う。絡み合い惹かれ合い憑いては離れを繰り返し次第に地面に堕ちてい行く。
「ダイヤモンドダストって云うんだよね」茅野が言葉にする。
「よく知ってるなぁ、日本語だと細氷って云うんだ」俺は茅野の言葉をあたためるように「さいひょう」と言葉にした。
「さいひょう？ はじめて聞いたよ」そう云うと茅野は俺の顔をニコニコしながら見ていた。
　湿度を抱えた空気が冷やされ霞みはじめる。凍ったそれは月明かりに映しだされキラキラと光り輝いていた。
「寒いから家いくべし。腹減ったろう。俺もまだご飯食べてないからご飯食べよう。チャーハンとスープだけど作ったから」
「こうくん自分で作ったの？ 凄いね。メグから聞いていたけど、こうくん料理するんだよって……」
「簡単なものだけな……」
　肩を並べて歩いていると茅野がブーツを滑らせ転びそうになる。俺は反射的に腕を取り茅野の体を支えた。俺は茅野の手を握った。強くそっと。茅野の手は戸惑うように俺の手に委ねられていた。自ら握り返すことは無い。
茅野のブーツがまた滑る。今度は茅野が俺の手を強く握った。

　鍵を開け玄関に入ると茶の間へと続く扉を開ける。
「あったかーい」
「寒かったべ、少し暖かさに慣れるまでこれ使っておけ」俺は用意しておいたタオルケットを茅野のひざ元に投げかけた。
「チョットスープ温めて来るわ」そういうと俺は茶の間の時計を見る。
　既に時刻は二十一時五十分を指していた。
「カヤ……もしもお前が嫌でなければ泊っていくか。最終のバスまであと四十分しかないし。お前の家の方が問題なければ俺は泊っても大丈夫だぞ」
　俺はスープに火を入れながら言葉にした。
【おい、誰が喋ってんだよ！　　俺かよ、俺が喋ってんのかよ……】

「泊ってもいいかなぁ。家には友達の家に泊まりに行ってくるって言って出てきたし。朝早くのバスで帰って着替えして学校に行くつもりだったし」俺のチャーハンを温める手が震える。
「凄いねぇ～本当になれてるね」茅野の声が俺の真後ろでする。後ろから覗き込んだ茅

野の甘い匂いが俺の肩口から漂う。
「食うぞ (くっちまうぞ！!)」俺はそう云うと、茶の間のソファーからタオルケットを取り茅野に渡した。茅野はタオルケットで足元を巻くように包み込むとスープを両手で包み込みフーフーと息を吹きかけ冷ましながら飲んでいた。
　温まってきたせいなのだろう。外ではあんなに赤くなっていた目元の赤みが取れ、茅野の顔は真っ白で柔らかく艶めいて見えた。
【こんなにマジマジとカヤの顔を見たことは無かったなぁ】俺は茅野の左目の端、下のところに大きめな黒子があるのをみとめた。
【カヤ……、お前のその黒子は泣き黒子って云うんだぞ。大丈夫かお前】
　俺はチャーハンを頬張りながら他愛のない話を茅野に振る。茅野の笑顔は美しかった。育ちが良いせいなのだろう食事の仕方も品が良かった。
「なんか不思議な感じ」茅野がスープを手に持ちながら言葉にする。俺は返す言葉に窮していた。何を言葉として発したとしても下心を見透かされそうに思えた。
「カヤ、多かったら残せよ。遠慮しなくていいから残せ残せ」箸の進みが遅い茅野に残すことを促す。
「うん、体も温まったよ。チャーハンはごめんだけど多いから残すね」
「気にするな。まぁ、不思議っちゃぁ不思議だよな。俺、カヤの顔をこんなに間近で見た記憶もなかったし。今、初めてゆっくり見てる」
【何言ってんだ俺。ゆっくり見ないことが普通だべや】
「だよねぇ、カヤもおんなじ。同じクラスに居てもそんなに近くで見ることも無いし、まして男子じゃそんなに見れないし。修だって最初の頃はカヤの顔チャンと見てくれなかったもん。でも女の子って顔を見ていてほしいのよ。色んなことに気付いてほしいから。でもね、修はダメだったなぁ」
　そう云う茅野の目から一筋の涙がこぼれ落ちた。
【メグ……ごめん俺はヤバいかもしれない。俺は今夜きっとカヤを抱く】
「上に行こうか」俺がそう告げるとカヤはそれに従った。

　部屋のストーブに火を入れると窓を少しだけ開け俺は煙草に火をつけた。
「こうくん……、私にも一本ちょうだい」正直驚いた。カヤの口から煙草を求める言葉が出るとは思わなかった。俺は無言のまま煙草とライターを茅野に手渡した。
　驚いたことに茅野は煙草を吸いなれており、噎せ返ることも無く手に持つ煙草をくゆらせる姿も胴に入ったものだった。
「煙草、吸いなれてるなぁ」
「ウフッ。時々ね。時々……三年目ぐらいかな」
　俺は笑うことしか出来ずにいた。「メグは知っているのか」危なく口を衝きそうになる言葉を飲み込む。換気のために開けた窓から雪が入り込み始めていた。
「雪降ってきたな……」
「ほんとだ」
　机の前の椅子に座った俺を横切るように机に手を置き、身を乗り出した茅野は窓の外の雪を見た。茅野の指には煙草は無かった。俺の膝が茅野の膝上あたりに触れている。

【無理だべ……　カヤ】俺は回転式の灰皿で煙草の火を潰すように消すと後ろから茅野を抱きしめた。茅野は抵抗をみせなかった。自ら体を開き俺の首にしがみ付くと胸に顔をうずめる。俺は椅子に座ると茅野を俺の足の上、横向きに座らせ自分の鼻を使いながら茅野のこめかみ辺りをツンツンする。茅野の顔が上がり俺を見る。

俺たちは鼻と鼻で挨拶を交わすと唇を重ねた。

頬に茅野の涙が伝わり流れ落ちていくのが感じられた。首に回した茅野の腕に力が入った。茅野を抱きしめたその手に力を籠める。茅野は「はっ」と一度口を外すと自分のおでこを俺のおでこに寄せた。二人の唇の間にはキラキラと輝く絹糸が雫をともない繋がっていた。どちらからともなく再び唇を重ねる。お互いの舌を求めあいそれぞれの口腔を彷徨う。茅野の舌はときに宙を舞った。まだ馴れていないのだろう。それでも茅野は懸命だった。絡み合い惹かれ合い憑いては離れを繰り返す。

「男の人って……、好きでもない子と出来るの？」

俺の部屋の時計は二十二時三十分を過ぎたところだった。

最終のバスは時おりブレーキ灯を灯しながら走り出した頃だろう。むき出しになったアスファルトを傷つけ削るように「チャイチャイチュリチュリ……チャイチュリ」と深夜の町にコダマを響かせ。

■

朝を迎えるころ。茅野の躰は俺に馴染んでいた。乳首を優しく噛むだけで首をのけぞらせデコルテを露に嘆いてみせた。花弁に指を這わせ秘芯の包みに触れるだけでとめどない潤いが真新しいシーツを濡らした。“もう駄目” と何度啼いただろう。そのたびに茅野は俺の首や背中に回した手に力を込めた。

膝頭をあまく噛み、脹脛を優しく噛みながら足の指を含み舌を這わせた。搾りたてのレモンのような刺激を伴う若い潤いも朝には無味無臭に近くなっていた。

朝七時前。茅野はバス乗って帰って行った。俺も茅野もどちらからもメグのことは口には出さなかった。それが当然であるかのように、どちらからも名前は出さなかった。

その日から三日後の夕方。俺はメグに全てを打ち明け謝った。

次の日俺は学校で茅野に告げた。メグに全てを打ち明けたことを。

「ェエーっ! バッカじゃなぁい、なんで云うかなぁ」

【あ〜、そうかぁ。俺はバカなんだ。多分、救いようが無いほどの馬鹿なのだろう】俺はそう気付いた。あまりにも遅かった。

ただ俺の中の “なにか” はこの日死んだ。たしかに絶望と共に死んだ。

幼な過ぎたのか。バカだったのか。愚かだったのか。無知だったのか。死んだものは生き返らない。どうでも良かった。

それから数日後、俺は学校を退学した。

細氷が春の雨に変わる前に。

俺の時計はあれ以来、時間を刻むことをやめてしまったままであることだけは確かなのだ。

了

■エセー・随想好日『私の中のなにかが死んだ日』

ルノワール-２.png

『小説・細氷 / 17 の Diamond dust』に寄せて

文藝の短編賞応募にむけ書き下ろしたつもりだった。
読めば読むほど既視感をともない当時のことが思い出される。
一つ一つの言葉。一つ一つの仕草……
煙草を吸う
指を絡めながら流した涙
“男の人って. . . …” あなたの口がそう呟いた日
後のことなど考えもせずに
二人にとって共通の傷つく人の顔さえ
その瞬間を昂らせるものだったのか
幼過ぎたのか。無知だったのか。無責任だったのか
傍にいて欲しいと思うことは悪なのか
傍にいてやりたいと思うことは悪なのか
ただきっと人ではなかったのだろう
ただあの日を境に俺たちの中の何かは死んだ

あまりにも早すぎる死を自分たちの中に見た
息を吹き返すことだけは無かった
17 歳という早すぎる死

思えば四十数年それをずっと抱えている。
いつかは書こう。いつかは書かなければ。
焼けた栗を素手で握るように……
手のひらを焼き、握った手の中爆 (は) ぜる。
出口を求めるように
助けてくれと叫ぶように
それは容赦なく握った手の中で爆 (は) ぜた
幾夜も幾年月も
影を追いながら

書き上げてからも時に魘 (うな) され、原稿に向かうと頭を掻きむしり、そして奇声を発する始末だ。まぁ、別に人様の前でおかしなことになるわけではないのであるからして自己完結できる話ではある。

　むかし読んだ吉行淳之介のエセーのなか。
　オモシロい表現が使われていたことを思い出す。
「キャッと叫んでろくろ首になる」というものなのだが、確か、野坂か阿川か安岡か北のいずれかが言い出しっぺだったようだが、吉行はこの言葉をいたく気に入っていた。
　想い出したが、マアジャンの席で危険パイを切る時に北杜夫先生が使った言葉だったかもしれない。たしか麻雀の時だ。

　男は生きていると、ときにキャッと叫んでろくろ首になるようだ。
深く同意するのである。ろくろ首の首で “め” の字を書いて鉈でぶった切られるほどのものであるのだが。

　結局ふたつのことを除いて書けた。
　これは墓場までだ。かかずとも良いことだ。
　あまりにも傷つきあまりにも傷つけた。
　あの日のこと。
　わたしの中で完全に何かが死んだ日。
　決定的な何かが死んだ日だった。
　もう一人決定的に何かが死んだ日になった人物がいるだろう。
　そして一番深い愛をみせ何も悪くはなかったはずの人間の何かも死んだ日

となったろう。

レクイエムを捧げよう。それぞれが抱えそれぞれが失ったもの達に。
そして誰かがそのレクイエムを書かなければならなかっただけのことなのだ。関わった誰かが死んだものを抱えた誰かが。

いまだ骸に原罪と共に閉じこもったままの誰かが。
そしてそのまま眠るだけである。

了

当然のようにわたしは結局この作品の応募も見送った。
鎮魂歌で賞に応募?　この不埒者。そう思っただけのこと。でも、インターネット小説の分野では送ったのであるよ (笑)　なんのこっちゃ www
そのうち e-puboo に綴じるだろう。

世一

■詩編『もう一つの夢殿』

もう一つの夢殿

人は泣きて生まれ落ちる
一生のうちに何度泣くかを告げられぬまま
知らされぬままに

潮満ちて人は笑うことをおぼえる
一生のうちに何度笑うかを告げられぬまま
知らされぬままに。

いつしか泣くことは、哭くことを選び
笑うことは嗤うことを選ぶ
それぞれの夢殿を前に人
はたと気つく
何度泣けただろう
何度笑えたのか

哭いた数は九十九に及び

嗤た数は数知れず

生ける間に開けておくは
吾夢殿の扉であった
と痴れば芳し

世一

　さてまた随分と埃くさいものを引き摺り出してきたと口元を緩めた貴兄。
いや、確かに埃くさいのである。
なにせ紀元前に活躍した哲学者の二人である。
　人の生まれを顕したように “泣く人” と呼ばれた哲学者、ヘラクレイトスの方が古い。
一方、“笑う人” と呼ばれたデモクリトスの方が若い。
　さて、この二人。芸術の世界においても存在感は高い。
バロック音楽全盛時にはこの二人をモチーフとしたオペラ用の楽曲も作られている。もちろん絵画も同様に幾度となく二人を描いた作品が発表されてきたのだが……

　そもそも拙著「夢殿・笑うひと泣くひと」の着想がこの二人の哲学者たちにあったことを知る人はいない。筆者が管理する本名と会社の名前を綴ったオフィシャルブログですらそこまでは書いていなかったと記憶する。
　哲学や人文学、美術史を修めてこられた御仁であれば「笑うひと泣くひと」の言葉から、何やらどこかで聞いた風な……と考えることは不思議ではない。
　小説では画家・不染鉄とアーネストフェノロサを対比させながらの話しとなっているが、不染鉄は無類の愛妻家であったが盛期に病気で妻を失っている。それ以来、鉄は憂鬱を深めている。
　他方、フェノロサは実父を自殺で失うという苦しみを乗り越えている。結婚は二度ほどしたようでもあり、招へいを受け来日した際には細君も同伴したと伝わっている。
　今年、東京でボストン美術館展が延期の末の開幕をみたはずだ……。わたしも事情がゆるせば行きたかったところではあったが、結局見られず仕舞いに終わっている。

　わたしにはこの系統の作品としてもう一つだけ書かなければならない作家・作品を残している
　それが “河井寛次郎” という民藝作陶家である。
　河井は詩編も知られたところであり、一行詩、散文詩、書家としても知られている。
「暮らしが仕事、仕事が暮らし」
「この世は自分を見に来たところ、探しに来たところ」
日常生活における “用の美” を追求した作品群は素朴であり、静謐であり、力強い。
　河井が愛したもの、突き詰めたテーマに「円」がある。

同時に河井は人をそして人の暮らしそのものを愛した。
その姿が作品として残された数々の民藝陶器の一群だ。
シンメトリーを愛し、左右に対称をみれども表裏に対称ではなしの姿は
人間を愛した河井ならではの作陶成果。
　突き詰めるところ、円、真円は河井の考える “魂の姿”
表裏無し、左右無し。
　わが夢殿に向き合う前に書き上げておきたい小説の一本である。

あとがき

２０２２-08-17＼(２＼).png

エセーや詩編は後から加えるかもしれぬが、取り敢えず納まりは見た。
書いていて感じたことだが、私小説と純文学の仕分けが微妙であることに気付いた。
なんとも分かりにくいのである。
「凍裂」と「細氷」などはほぼほぼ私小説と申し上げても良いだろうが、一部やはり脚色は入る。
どの辺が脚色かは読み手が楽しめば良かろうかとも思う。

まぁ、無冠の天才作家の小説集第二部、これにて脱稿。
いいじゃん♬　誰も言ってくれないことなのだから、せめて自分で云って楽しむぐらいはありじゃね (笑)

　想い出に是非ダウンロードして頂いて、こんなのもいたなぁ、あったなぁ……思い出して頂ければ幸甚に存じます。

筆名　飛 鳥 世 一・M.Misha(ムッシュ・ミシャ)

小説『 凍 裂 』

著　　飛鳥世一

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社